

# 針葉樹会報

第97号  
2002年11月



## 目次

		● 追悼 ●	
	日江井、檜渕ご両氏を偲んで……………	深谷	光茂
	檜渕君のこと……………	佐藤	政雄
	檜渕明君のこと……………	林	正敏
	望月敏治さん有難う……………	中村	正司
		堀岡	清
		● 談話 ●	
	ネパール・ネワール族の成人式……………	横山	皖一
	ツール・ド・シルクロード……………		
	(自転車でシルクロードを走る)……………	春日井	実
	氷河公園北部徒歩き……………	加地	幸雄
	41年ぶりのヤロー共……………	山本	尚禎
	ぐうたら登山紀行(続)……………	大建	二郎
		会務報告	
	平成14年度針葉樹総会……………		
	八十周年記念事業(日本山岳会への寄付)……………		
	一木会報告など……………		
	メール通信……………		
	編集後記……………		
	表紙写真IIシャンポチエの丘からの……………		
	エベレストとローツェ(右)／横山皖一撮影……………		

発行日 2002年11月25日 発行者 針葉樹会 印刷所 ヤマノ印刷(株)	<b>針葉樹会報</b> <b>第97号</b>	編集人 佐薙 恭 〒240-0066 横浜市保土ヶ谷区釜台町5-4-806 会報幹事／佐薙 恭、井草長雄 川名真理、大谷公重
---	-----------------------------	--

## 追悼

### 日江井、檉渕ご両氏を偲んで

深谷 光茂（昭16年）

私が商大予科に入学したのは昭和11年、2・26事件の直後の昭和11年4月です。16歳で田舎の中学（旧制）を出て、東京のことで西も東も分らずに上京して新しく出来た小平の一橋寮に入寮しました。

当時同じクラスの友人（その後退部しましたが）に山の良さ、楽しさなど聞かされ、私なりに何となくそして漠然としたものではありましたが、山の魅力にひかれ、その友人の紹介にて入部させて貰った次第です。

その頃1年上級生に日江井さん、1年下級生に檉渕さんが居られました。そのお二人が最近亡くなられた由伺い本当にびっくりいたしました。お二人とも元気でおられるとばかり思っておりましたのに。

私は上のような次第で入部はいたしました。が、元来体力には余り自信がなかったもので

すから、厳しい山行きではなく、北アルプス縦走、夏場の涸沢合宿、南アルプス（北岳）行、冬場の乗鞍合宿等で、その間お二人との重いリュックを背負った苦しい山登り、また苦勞した後の楽しかった合宿生活などが、この間のことのように思い出されます。

日江井さんは非常に温厚な方で、入部以来山岳部生活のいろいろ、また針葉樹会のことなど、こと細かく親切にご指導いただいたことを今でも有り難く思い起こします。

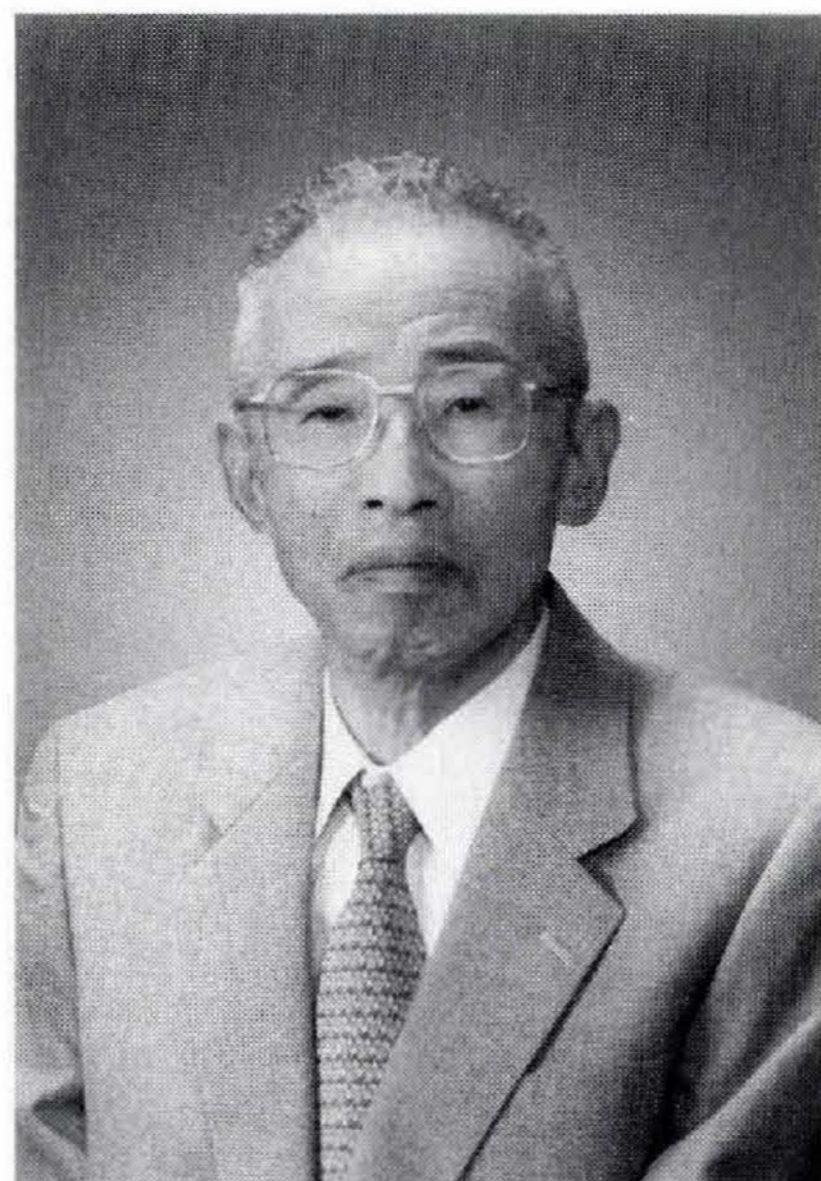
檉渕さんは同郷（栃木県）かつ宇都宮中学（現宇都宮高校）の同窓でして山岳部生活以外でも親しくさせていただいていました。

彼は鹿沼のご大家の御曹子として温厚かつおおらかなお人柄で誰からも敬愛されていました。ずっと離れていましたので毎年の年賀状のやりとりで、お互いの無事を確認し合っていたところでしたのに本当に残念でなりません。六十数年前のお二人との思い出の数々は走馬灯のように尽きませんが、今は唯々お二人のご冥福を心からお祈りするばかりです。

最後になりましたが、本年、山岳部設立80周年を迎えるに当り益々の発展をお祈りする

と共に、山岳部の発展が山岳部をこよなく愛してやまなかつた亡きお二人に対する最大の供養になるものと思います。

日江井正巳氏



## 檜渕君のこと

佐藤 政雄（昭17年）

予科3年（昭和14年）4月末、南アルプス縦走の大塚武先輩と、山田、根本、檜渕と北岳登頂を目ざして甲府より夜叉神峠を越えてマムシ平の小屋に入った。

翌早朝、右手取り付き尾根を間違え、左手の崖に登り、途中で気がつき、平に降り始めた。崖を横切る太い根を握り、バランスを取り降る。最後尾の檜渕に注意した途端、リュックに振られ落ちた。幸運にも途中の倒木にリュックを下に止った。頭に5糎程の傷を負った。

小屋に戻り、応急の処置をして、大塚先輩と私が夜叉神峠を越え、甲府に戻り、病院で手当をして甲府駅より三鷹の下宿に送った。山岳部に在籍したが山には登らなかった。御冥福を祈る。



檜渕明氏

## 檜渕 明君のこと

林 正敏（昭17年）

昭和12年4月、東京商科大学予科入学。檜渕君と同期である。然し山岳部では彼の方が先輩。あとから入部して、彼が北岳山行の途次アクシデントで負傷、それから山行を控えていることを知った。

山岳部の部室は楽しかった。講義には出席しなくても部室には顔を出す、彼もそのひとりだった。アルピニズム論争華やかな中に、彼は聞き入ってはいたが余計な口は挟まなかった。落ち葉焚きを囲んだなかに、誰かと話しこんでいる、剃りあとの濃い彼の横顔が眼に浮かぶ。

昭和17年9月卒業、10月軍務についた。翌18年、小平にある陸軍の学校でしごかれていた最中、すれちがった別の教育隊のなかに彼を見つけて、思わず手を上げたら彼も一瞬笑顔で手を振り、互いに走り去った。

あれから59年、故郷の鹿沼市に戻った彼とは年に一度の年賀状だけで、ついに会うこと

がなかったのが心に残る。

笑顔のいい男だった。心からご冥福を祈る。

### 望月敏治さん有難う

中村 正司（昭28年）

「6月28日望月さん他界」の報を受けた時、あまりの悲報に驚くばかりだった。昨秋、涸沢であれ程頑張った後、帰宅して入院し、ガン手術をしたが、軽々と病を一蹴したが如く明るい顔で、次回の山行を語っていたではなかったか！ 実はご家族の深慮で希望の余命を過ぎられたとの由、心からご冥福を祈りたい。

顧みればシルバー時代に入ってから15年の長きに亘り、中樹会のリーダー役として無くてはならない人を失ってしまった悲しみは甚だ大きい。今までこの集りが続いたのも、望月さんの人柄のお蔭だ。物静かで、包容力のある先輩だった。多忙な人には事前に希望日を打診してくれた。持病者も共に参加できる山行の方法を何時も心配してくれた。難聴者には、ゆっくりと噛みくだくように語尾を

締めて話してもくれた。健脚を誇示することは一度もなく、何時もシンガリに居てもくれた。やさしい人だった。

予科時代、昭22年私が入部して間もなくの5月、マチガ沢予科合宿で起きた山中さん遭難事件は、たまたま彼が佐藤さん（昭63没）と共に予科最高学年であったために、大変辛い思いをされたことと思う。しかしこの逆境は、私達下級生と心底まで信頼し合える親しい関係にしてくれたように思う。



望月敏治さん（前列右から2人目）最後の山行、2001年9月

国立時代は、恒例の山行に加え、部室の改修募金活動で日夜苦勞を共に出来、後日「学部は？」と聞かれて「山岳部」と答えるまでになったと、お互いに笑い合ったものである。

シルバー時代に入るや平成と共に望月、佐藤（昭26）、横山、小泉（昭27）鹿俣、荒砥、澁谷、海老沢、南、高橋、中村（昭28）他が加わって、横山氏の宇佐見別荘に年一回は合宿するようになって、中樹会の名が生まれた。小舎の主が海外生活に入るや、望月、小泉両氏のリードで山行が実施されるようになった。その頃に、オーション会によるY中追悼登山が動機づけにもなったようだ。望月氏はその凡てに参加している。簡単に回顧すると

昭63 谷川マチガ沢山中追悼登山、

平1 乗鞍・上高地（秋）、

平2 尾瀬、

平3 木曾駒、

平4 那須三斗小屋、

平6 吾妻、

平9 金時山と秋、大菩薩、

平10 谷川岳、

平11 奥多摩、入笠、

平12 両神山と秋、柵池、

平13 涸沢（最後の登山となる）

上記山行とは別にスキー合宿（木立山荘2泊）が平5年から始まり、平13まで9年連続

して参加された。

最後となったスキーでの思い出

望月さんと私は二人並んでリフト乗場の傍で、立ちんぼしていた時のことである。上から滑って来た仲間達が近づいて来るや、我々を見て腰を抜かす程驚いている様子。

ふと我に返ってみると、望月さんの片手は白い包帯が巻きつけられており、一方の私は片目だけのサングラスで立っているではないか！

事情はこうだったのだ。私がサングラスを部屋に忘れたため、望月さんが貸してくれると云う。でも「リフトを降りてから」と何度も固辞したが、大丈夫といって手袋を脇に挟み、サブザックから取り出して私に貸してくれた。私はそのガラスの雪を手袋したまま軽く払ったら、片方のレンズが落下した。

一方、望月さんも片方の手袋が脇から落下したため、係員に探してもらおうべく滑降したんだが、望月さんの片手は保温の為、私の手拭いを巻いたものだった。

私達は係員の探索の結果を待っているところだったのだ。

やさしい好々爺だった望月さんの思い出は尽きることがない。私達は彼の大きい懐に甘えて今日までがあったのだ。望月さん、何時までも貴方を忘れない。心からご冥福を祈る。

## 当時の山と人

堀岡 清（昭10年）

私が予科に入学したのは、昭和四年ですが、山岳部に入部したのは昭和五年、予科二年の時です。当時、ステムクリスチャニアの名手といわれたオーストリーのハンネス・シュナイダーの「スキーの驚異」という映画が全国で上映されておりました。そのシュナイダーが日本各地で講習会をやりました。

昭和五年の三月、その講習会が野沢温泉でありまして、私はそこへ参加しました。予科の帽子をかぶり、酒屋へ行きましたが、どういう理由で酒屋へ行ったのか、どうしても思いうせません。予科の帽子から、商大生だというわけで、酒屋では、スキー合宿の本部になっている、二階か三階かの、角の部屋に入ってくれました。ちょうどその講習会に、奥野綱重さんが、おそらく会社をさぼってこられたんだと思うのですが、その奥野さんと同室になりました。一晩じっくり山岳部へ入れという勧誘を受けまして、予科二年の時に山岳部へ入れていただいたのです。ご承知の通り、奥野綱重さんというのは、奥野巖根会員のお父さんです。

当時私は陸上競技部に所属していましたが、夏休みになってもすぐ山岳部の行事に参加できず、いわゆる一般の方や素人が行く縦走班には入れず、そういうのがみんな終って、先輩連中が上高地に集結した七月の二二日に上高地に入りました。これが私には非常に幸いしたというか、いろいろ先輩と一緒することができましたが、最終的には磯野計蔵さん、同期の中島嘉一郎さん、当時本一の太田又一さん、「どんちゃん、どんちゃん」と言っていましたけど、その三人の方に連れられて穂高をひとわたり歩いたのです。

涸沢にテントを張っていた時に、一晩、すごい吹き降りになり、夜中に身支度をして、磯野さんとどんちゃん、両方の支柱に背中をよりかけて倒れないように、私が入り口の所で、雨風が入らないように番をしている間、中島さんは悠々と寝ているのです。そういう方でした、中島さんは。それで翌朝、上高地に退却することになって、徳沢の牧場まで来ると、案内人の中山彦一を連れた浦松（佐美太郎）さんが、牧場に泊まって居られました。

そして、「泊まれ泊まれ」というもんですから、我々も上高地行きをやめて、徳沢の牧場に泊まりました。

浦松さんという方はご承知だと思いますけども、この方は、山岳部の出ではないと聞いております。如水会員になってから、松方さんとヨーロッパアルプスを歩いて、たしかヴェッターホルンではなかったでしょうか、なんとかという未踏の稜を登ったということ、で有名になり、記録によると昭和四年の四月五日に、針葉樹会で帰京歓迎会をやっております。それから日本の山も歩いたようですよ、昭和五年の四月、磯野さんと中島さんが計画された剣・針ノ木越えに浦松さんが同行されております。そんなことで磯野さんと浦松さんとはお親しくなっておったので、向こうの勧めに応じて徳沢に泊まったのではないかと思っております。

そうしてその時に、いろいろヨーロッパアルプスの話を聞きましたし、それからアルフレッド・ベンドのピッケルが非常にいいからということ、ベンドのピッケルを五本（現地から）取ってもらって、そのうちの一本を私が分けてもらっております。このことは私が吉沢さんの追悼記にも書きましたが、この間その追悼記を読んでみますと、シエンクの

ピッケルとなっておりませんが、これは間違いです。当時日本でピッケルというほとんどシエンクだったのですが、浦松さんのお話ではベンドの方がいいと。（アルフレッド・ベンド、グリンデルワールド）という刻印が入って、ブレードのところがキュッと曲がっていて、なかなか格好のいいやつです。それを取り寄せてもらうことになったわけです。吉沢さんの追悼記は間違いですから、ここで訂正させていただきます。

そうして、浦松さんは中山を連れて、奥又白から前穂へ直登すると。それで天気待ちしていたのです。で、我々も途中までそれに同行いたしました。われわれは途中から別れて北尾根を登り、穂高小屋に入り、そして翌日西穂を通過して上高地に下りました。ちょうど穂高小屋に入ります時に、信州側から飛騨側にかなりの霧が、相当な勢いで越しております。そこへ行きますと、後ろから夕日を受けて、自分の姿が霧に映る、いわゆる「ウィンパーのお化け」というのですか、そういうものを見ることができました。次の日は非常にいい天気、真つ白いもくもくとした雲が連なっている上に、富士山がちょこつと頭を出している。とても大きな眺めで、三千メートルの山に初めて登った私には非常な感激でございました。

我々がその時に、前穂の頂上を見ますと、二つの人影があるわけです。「浦松さん達ではないか」、「浦松さん達は今日登る筈だ、それにしては早すぎる」と話しておったのですが、後で聞いてみますと、昨日のうちに登りきって、前穂の頂上でビバークしたのだそうです。（暗いものですから、中山彦一が角砂糖とメタを間違って飲むところだった。それから浦松さんは望遠鏡を持っているので、奥穂を歩いている我々のことはよく見えた」と、後で言っております。

こういうわけで予科二年の駆け出しの私が一夏で穂高を一通り歩くことができた。しかも西穂は商大山岳部はその時が初めての記録だそうです。そういうことが九月の針葉樹会の例会で、話に出まして、近藤恒雄という、「こんちゃん、こんちゃん」といつていた三井鉱山の方ですが、口が悪いものですから、「今年はおぼちやの当たり年だ」と、そういつて私は冷やかされました。ところが、かぼちやの当たり年がさらに続きまして、十二月の、冬の鹿島槍に参加することが出来たのでした。磯野計蔵さんは、ご存知、明治屋の社長をされた方です。そして、昔の部室、あれはたしか昭和六年の四月に上棟式をやっています。この部室は磯野さんのお父さんの長蔵さ

石井さんと談笑する堀岡さん（左）



んという方からの寄付金が元で作られたものだ」と聞いております。とにかく、当時の山岳部の中心的存在でありました。

そしてこの時の鹿島槍の紀行文を針葉樹六号に出すのですが、磯野さんが私に書けというわけです。予科のまだ二年生で、三年になるかならないかの私に書けと言われるのです。それは磯野さんが日本山岳会の山岳二六年の一号に「爺小屋を根拠とする冬の鹿島槍」という題で寄稿して居られたものですから、同じような文になるのをおそれて、私に書けと言ったのだと思います。

ところが、磯野さん、私に曰く、「俺が遭

難したことだけは書くなよ、家に知れたら山に行けなくなるからな」と。私も両親にはかねがね山は危ない、危ないと言われておるものですから、どこの家庭も同じだなあと思いました。それで、私の冬の鹿島槍の紀行には遭難のことは一言も書いておりません。ところが、記録の方を見ますと、磯野遭難とはつきり書いてあるわけです。もう一つ、学連の報告の三号には「大冷沢の西俣に磯野が二〇〇mくらい落ちた」と、場所まで特定して書いてあるわけです。これは、磯野さんが記録を出す人に口止めするのを忘れたか、そこまで家の人は見ないからいいというふうに通じたのか、それはわかりませんが、とにかく針葉樹の六号に、私が何も遭難のことを書いてないのは、そういうふうに通じたのか、口止めされたためであります。今日、その遭難の模様をお話してみたいと思います。

【注】学連というのはその頃、関東学生登山連盟というのがありまして、我が一橋は、立教や早稲田といっしょに、第五セクションに組み入れられておりまして、時々会合があり、私も一、二回出た記憶があります。

その磯野さんの遭難ですが、爺岳を過ぎますと、腰まで潜るくらいに雪が深くなったので、我々はそこでスキーに履き替えまして、

進んだのですが、布引と冷池の間、ちょうど大冷沢西俣の下り口の手前に、稜線が「く」の字に切れこんでいるところがありました。この一番引つ込んだところから、登りになっていくわけです。そして後でわかったのですが、稜線の天辺に木が生えている。我々は雪庇には十分気をつけておったわけですけども、まさかそんなところに木が生えているというふうには思わなかったと思うのです。先頭が中山で、二番目に私、その次に磯野さん、四番目に私と同期の安達というのが続いております。私がちょうど登りにかかったら、スキーがスリップするのです。それでひよつとふりかえりましたら、グワつという非常に気味の悪い音とともに、磯野さんが横倒しになって股開いて、落ちていくところでした。だから磯野さんが直接落ちるところを見たのは、私と

磯野さんの次に歩いておった安達の二人だけだろうと思います。おそらく、一五mか二〇mくらい雪庇の上に乗ったまま落ちたのではないのでしょうか。雪の上に落ちますと、そのまま大きな雪玉と一緒にスーッと流れていった。みんなが、見えるところまで集り、

「あ、止まった」

「あ、なんか動いたぞ、立った」

「なんだスキー大丈夫かな、ストック片方しかないみたいだ」

中山と、高橋益司という人夫の二人が、大丈夫ですか、大丈夫ですかと大きな声で叫んだが、おそらく聞こえなかっただろうと思います。

中山が下り口を見つけて直ちに下りていった。ちょうどそれは私の山日記を見ますと、午前八時十分と書いてあります。小屋を出たのはたしか五時五〇分頃でした、それから磯野さんが赤い顔をして登ってきたのが八時四〇分と書いてあります。まあ、三〇分くらいで上がってきたのですから、標高差としては二〇〇mも落ちてないんじゃないかと、思います。非常に幸いなことには、岩が出てなかった、全部雪で埋まっていたので、マットの上に着いたような格好になったと思います。従って、ストックを片方流されただけで、この怪我もありませんし、持ち物の壊れもなくて、非常に幸いでした。

この日は、それまで非常に天気良かったのですが、一〇時過ぎから天気がおかしくなり、一二時ちよつと前に、鹿島槍の頂上に着いた時はもう吹雪き模様。頂上にはちよつと背丈くらいのシュタインマンがあるんですが、それがちよつと頭出てるくらい。

中山が「いやー、だれも来たような気配ないぞ」と言いながら、用意してあった木をそこへ挿して、そして磯野さんに「おめでとう

ございます」と正月の挨拶をしていたのが非常にうれしそうでした。その日はちよつと一月一日でしたし、遭難しても、特別の怪我もありませんし、特別おめでたいという気持ちだったろうと思います。

さきほど申し上げた学連の報告を見てみると、一二月の一八日に立教の堀田君が、桜井一雄を連れて一二月一八日に鎌尾根から鹿島槍に登頂したと、出ております。そして二四日に西俣の長ザクを詰めて、種池の小屋付近から扇沢を通って畠山経由、大町の対山館に入ったと、書いております。この二四日は我々が山に入るので対山館に泊まっている日であります。

立教は当然商大の予定を知っていますから、それで種池を回ったと思うのですが、種池の小屋はすっかり雪に埋まって、見あたらないと、そう注意をしにくれたようです。私は寝ていましたから知りませんでした、磯野さんと中山がこの堀田君と桜井に会って、その話を聞いて、その時に一八日に登ったという話も聞いたのだと思います。中山が「誰も来た気配ねえなあ」と言ったのは、そのことだったろうと私は後で思いました。

ここで中山彦一についてちよつとお話したいと思います。中山彦一は、安曇追分に住ん

でおりまして、有明口登山案内所組合に所属する、まあ小柄というか中肉中背というか、五〇歳くらいに見える純朴な田舎のおっさんみたいな感じの人です。しかし、昭和五年の山日記を見ますと、四一歳と書いてある。とても四一歳とは思えないような年格好でした。

この人は非常に岩登りが強くて、小槍の初登攀をした人だと聞いております。山案内が職業ですが、私は彼自身が非常に山が好きだったのでないか、だから我々が色々話をしているうちに、自分も行ってみたいようなところを勧めてくれたのではないかと思います。私が昭和七年の一月に、乗鞍を越えて飛騨に行ったのは、このとき中山が「あそこはスキーいいですよ、いいですよ」というものですから、それで私が計画した記憶があります。

おそらくこの冬の鹿島槍は、徳沢の牧場に我々が泊まっている時に、磯野さんと中山が計画したのではないのでしょうか。二人で一〇月に下見に行っています。磯野さんの書いたものを読みますと、中島嘉一郎さんは、この時の二学期に体を壊して、郷里に帰ったと書いてありますが、中島さんが元気であれば当然、磯野さんと二人でやったことだと思いませんけれども、磯野さんが一人でこれを計画されたのは、中島さんが体を悪くした為だと思



ます。

我々が畠山の小屋に入ったのは、十二月二十五日、そして天気が悪くなった二七日に種池の小屋に登ったのですが、もし天気がよければ、小屋を探すよりもテントで幕営して一気に頂上へ行ってしまおうという計画だったものですから、余計なものはみんな畠山の小屋に置いて、本当に必要なものだけ持って出掛けたのですが、昼過ぎから天気がおかしくなつて、尾根筋にでた頃はもう吹雪模様になつていました。夏道ですと種池の小屋の手前に、五尺くらいの標柱が立っているのだからです。

（標柱の頭でも出てないかなあ、便所の頭でも出てないかなあ）そんなことを人夫達と空頼みをしながら行つたのですが、全く何もわからないのです。一応探してみようというので、中山が周りの様子をずうつと見ましたが、天気が悪く周りの山は見えません。だからせいぜい三、四〇〇メートルの視界の中で、彼が色々見て、この辺だというので、皆、持ってきたピッケルやストックを雪に突き刺して、小屋のどっかに当たらないかとやったのですが、当時から私は他の人よりも長めのストックを持っていたものですから、それが幸いしか、リングの手前でゴツゴツし入っていないのです。「あー、ここ堅いぞ」というの

で皆集まってきた、どうもこりや雪の塊でもなさそうだ、いうんでさつそく高橋益司というのと近藤一雄というのが、持ってきたスコップで掘り出し、まさしく種池の小屋の屋根を出しました。中山の判断の正確なのは感心致しました。

それで幕営するのを止めて、すぐ小屋に入りました。当然小屋は雪の中に埋まつてゐるという予想ですから、荷揚げは小屋でなくて近所の森林帯に上げてありましたが、米と味噌と燃料だけは十分にありまして、天気待ちしようということになりました。が、嗜好品は全部畠山の小屋に置いてきたので、お茶もないんですね。ところが中山が、お米を茶色く炒つて、それにお湯入れて、いわゆる米茶というやつです。なかなか香ばしくつてお茶代わりには飲めた。残つたやつに砂糖を入れるとオートミールみたいになった。

それからまた中山が山に出かける時に、大きな鍋でご飯を炊きますね。そうすると蓋にですね、かなりの量のご飯を載せて脇に置いておくわけです。何をするのかと思つていと、腹一杯食べた後、我々に食べると、こう言うわけです。いやもう腹一杯だというと、「だめだ、これは山の神に捧げたものなんだからどうしても食べろ」と言つて、むりやり

食べさせた。山に行く前に十二分に腹ごしらえさせる一つの手段だったのでね。そういうことを中山に教わつたのであります。

この鹿島槍の時、往復ともに我々は中山の家に寄つております。あの辺はお茶請けに漬け物を出します。中山の家で出した漬け物は、おそらく野沢菜でないでしょうか。それを漬けたものを出してなかなかおいしかった記憶があります。私はそれを食べてお茶を飲んでるうちに、カッカしてきて顔が真っ赤になつたのです。あれ変だと思つて聞いてみると、焼酎を入れて漬けてある。酒に弱い私はお茶請けに酔つたということでした。

中山は酒も相当強い。こういうことがありました。さきほどお話しした乗鞍越えの時に、私どもが野沢温泉の合宿を打ち上げて、甲府から来る丸茂さんと合流するために、松本の飯田屋に泊まつた。その晩来る筈の中山が来ないので。あれーどうしたつて言つていと、次の日の朝、我々が朝飯を食つてゐる時に、

「やあ、ゆうべは近所の婚礼に呼ばれてすっかり遅くなつちやつて来れませんでした」  
そういつて入つてきて、

「どうだ、飯食わないか」とつていうと、  
「いやー、ご飯ご馳走になるよりも迎え酒一本欲しい」  
こう言うわけです。

それで飯田屋の番頭にそう言いますと、心得たもんです、一升枧に一杯入れてくるのです。私は一升枧からキューって言う話は聞いたことはありませんが、見たのは初めて。中山がそれをですね、いただきますって言って、二口か三口で飲み干すんですね。そして額をコンって叩いて、「ああ、おいしかった、ごちそうさまです」と。

この時の事は「乗鞍を越えて飛驒へ」という題で、針葉樹6号に鈴木英雄さんが書いております。前文の方にこうあります。

「チエーンを着けていない自動車は梓川の右岸にかかる、日陰に残った雪のためにスリップすること数度、大分肝を冷やす。これ以上は入れないと、前川渡で下ろされたが、先の方がかえって道がよく、番所までついに雪を踏むことがなかった。菊屋に着くと残り日を受けた頂上付近にはしきりに雪煙が上がつている。いくら入っても米の水ではだめらしく、(ここですね)この夜の彦さんの健啖ぶりには一同唾然」とこう書いてあります。ここはその一升枧の件がわからないと、この文が生きてこないわけです。

しかし、山の中ではそういう素振りも少しも見せない、立派なものでした。しかし、さすがの彦さんも、スキーだけは股制動で、下りになると「はい、堀岡さん」とテレモスは

私のとこに来るわけです。

ここで奥野さんとスキーということでお話いたします。奥野さんは昭和五年の一二月に、札幌に転勤になっております。それで昭和六年の三月、私が小樽へ帰りました時に、北大山岳部のパラダイスヒュッテを経由して、手稲山に登っております。いくら北海道でも三月の暖かい日になると、下の方では雪は腐っています。当時の我々のスキーは、イタヤで作っておりますから、水を吸わないように蠟をぬったくつても、とてもそんなものでは、もたないです。

私のスキーは水を吸って緩傾斜になると全く滑らない。ところが、一二月に札幌に行った奥野さんが、その当時輸入したヒッコリーで作った自慢のスキーを履いている。これはそんなことはないので、スースーと先に行ってしまう。こっちはすっかりうらやましくなって、早速奥野さんに頼んで私もヒッコリーのスキーを作ってもらったことになったのです。これは針葉樹の六号、七号、八号に広告が出ています。札幌の芳賀恒太郎という材木屋さんでスキーを作っていたのです。

今でも芳賀のスキーはあると思いますけど、これはその弟さんの方で、芳賀藤左衛門といまして、この人自身がスキーの走る方の選

手で、かなり有名な人でしたが、私どもの親しかつたのは、そのお兄さんの方の芳賀恒太郎という人です。

これも奥野さんのお世話だと思えますけども、その芳賀が、東京でヒッコリーのスキーを売りたいって言うので、片桐の隣だけに空いている店がありました。そこに販売所を開いたことがあります。たしか翌年はそこがふさがっておったものですから、片桐の二階に店を出したのではないのでしょうか。私は暇さえあればそこへ手伝いに行ったものです。

奥野さんが札幌に行かれてから、針葉樹会の会員でも北海道の冬山に行く人が増えてきました。したがって針葉樹会の例会でも、その話やスキーの話がさかんに出るものですか、おそらくそれに触発されたんでないでしょうか、中川さんが「俺もスキー始める」ってことになった。

中川さんは学生時代はもちろん、それまでスキー履いたことがないんですね。それで私にスキーを作れというご命令が来ました。先ほど話しました私が一番先に芳賀に作ってもらったヒッコリーのスキーは、平型で長くて幅が広くて、中学生のジャンプ用みたいなやつを履かされて、履きこなすのに非常に苦労した記憶があります。

私は山スキーというのは、担いで歩くことも多いし、つづら折りの夏道を降りることが多いんで、回転のしやすいように短い方がいい。しかし、ラッセルなんかありませんから、あんまり細くてはだめだというのが持論でした。その頃のスキーは、手を伸ばして、手の先がスキーの先まで来るのが、ちょうどいいっていうふうに言われておったんですが、それじゃ長いというのが、私の持論だったので、中川さんにそう言いましたら「お前にかす」と、こう言うんで私は中川さんに合うようなものを芳賀に頼んだ。

ところが芳賀がうんと言わないんですね。なぜだというと、「材木は、一台は一台取るようにもう木取りしてあるから、長くても短くても一本は一本しか取れない、木がもつたいない」と、こういうのです。それで私は「いやー、短くたって安くせいとは言わんから作れ」と言って作らせた。私はこれが中川さんのスキーに非常にプラスになったと思っております。

昭和一八年の二月に、私は中川さんと二人で草津から万座温泉に入って、横手、万座、あの辺を滑りまわったことがあります。その時の中川さんのスキーぶりを見て、やっぱり短くてちよつと幅の広いスキーが正解だったと私は思っております。

ちよつと余談になりますが、最近はその短いスキーというのがはやってきて、今年あたり新聞見ますと、回転競技には逆に一m五五より短くてはいかんと、そういう制限があるようですし、一m前後のファンスキーっていうのが非常にはやってるそうです。ただし回転がしやすいもんですから、それで骨折しますと膝下の螺旋骨折が非常に多い。だから短いスキーもいいけど、怪我しないように気をつけると、そういうふうに出ておりました。

それから、ヒツコリーのスキーではこういう話があります。日本アルプスの案内人組合の島々支部に、上條孫人というのがおりました。これはたしか嘉門次の縁の人だと思えます。明神池のところあたりに小屋があったんですが、望月君が旧知の間柄で、私は望月君にたしか紹介されたと思っておりますが、この上條が、美津濃からヒツコリーのスキー貰ったから、一ぺん滑ろうという話がありまして、昭和九年の五月、私は当時専門部の鷹野雄一君と、北尾根をやった時に、涸沢でこの上條と一緒に滑ったことがあります。

もちろん五月ですから、我々はゾンメルシーを持っていったんですが、もう雪固まっていますから、ゾンメルシーでも普通の上條の

ヒツコリーに劣ることはありませんでしたが、どうも上條の滑り方がおかしいんですね。それで、「おい、ちよつとスキー脱いで見せろ」といって、スキーを脱がしてみますと、片方がぎゅうつと曲がっているのです。これは美津濃が製品で輸入したのか、材で入れたものを美津濃が作ったのかそれはわかりませんけども、乾燥の悪い木で作ったのでしょう、曲がっているんです。だからそれを上條に説明して、「おまえがなんぼスキー上手でも、こんなの履いてスキー滑られるはずがねえ。直してもらおうか取り替えてもらえ」と言った覚えがあります。

それからスキーそのもの話ではないんですが、私の現役時代、ご承知の方もおると思いますが、小谷部以下の猛者連中に、「お前たちのスキーは人夫スキーだ。もうちよつとスキー練習しなきゃだめだ」とよく悪口を言ったもんです。それが頭にあっただけではないでしょうか、私が昭和一五年に東京に戻ってきた時に、小谷部君が「堀岡さん一緒に滑ろう」といって、昭和十六年の一月、林正敏君と大塚君と私が前穂に行った。後から上高地に入ってきた小谷部君が、たしか榎本君と船本君と一緒に滑ったので、一緒に朝出かけて、途中で別れ、帰りは一緒に滑ろうという

ことになった。前穂ですから我々の方が早く、別れた所で彼等を待って一緒に滑ったのですが、小谷部君曰く「いやあ変だ、こんな筈はない、こんな筈はない」といいながら悪戦苦闘しているんですね。

滑りやすいように作ったゲレンデで、少々派手な滑り方ができて、天然のゲレンデの岳川で、しかもジャンダルムを一つやってきた足腰の疲れっていうか、そういうものを加味した技術っていうのは、まだ小谷部君でもマスターはしてなかったわけです。こんなことというと小谷部君あゝの世で、「堀岡さんそんなひどいこというな」って言っているかもしれません。

それからもう一つスキーの話になりますが、昔の予科をご存知の方はわかると思いますが、体操科の先生というのは、みな下士官上がりのガチガチばかりでした。そうして、出席点数を押さえている。その他に学割は体操科で貰うわけです。だから山に行くのに学割貰いに行く、簡単にくれないのです。その体操科の二人くらいでしたか、野沢の合宿に参加したことがあります。

あのころは一般参加の人とか、シールを持ってない人には荷造り用の麻糸を網の目に編んで、それをシールの代わりにして登った

もんですが、体操科の連中もそういうふうにして登った。「大丈夫かなあ」と心配するので、「いやあ先生、大丈夫ですから」って言って毛無山の頂上まで引つ張り上げた。体操科の連中ですから、体力はありますから登りはなんでもない。ところが下りになるとこっちの思うつぼで、悪戦苦闘、日頃の溜飲を下げたわけです。ところがですね、それから学割を貰いに行くと、馬鹿に調子がいいんです。「いつてらっしゃい、気をつけてね」なんて（笑）、黙って学割をくれるようになった。これもスキーの効能だというふうに考えております。

それから、中川さんと二人きりで行った思出の山行きがあります。昭和一七年の八月夏ですが、はじめは村尾ぺんちゃん和三人で、ぺんちゃんの考えで、大日岳から剣に行こうという話だったので、ぺんちゃんが奥さんのお産の都合で行けなくなりました。で、中川さんと二人になった。まっすぐ剣沢の小屋に入りまして、八ッ峰から剣、次の日は黒部川を下ろう、そういうふうな案になりました。私は、荷物の重いのがいやなものですから、ザイルはもちろんアイゼンも持っていかない。中川さんは正式のアイゼンは持ってないが、三本爪ならあるっていうから、「いやあ三本爪で結構ですよ」と、そういう出かけた。

この年、小屋の連中の話を聞くと、雪が非常に少ないので雪溪の形が変わってますよって、言っていました。長次郎の出合から二股、それから五と六の間へ登って、そこから上へ行こうっていったのですが、雪溪の上りになると、三本爪を履いていても中川さんの足取りはどうも危なっかしいんですね。いやー、これはあるいは、ちょっと困ったことになるかももしらんなあと思っていたのですが、とにかく五と六の鞍部までとつついた。

それからこんどは岩登りになったんですが、中川さんは剣は初めてだったはずで、それで大分トレーニングやってきたようで、岩にかかると身軽で早いですね。こっちがフリー言ってる。上の方から「おい、今度はどっちだ」って声がかかる始末です。今はどうかわかりませんが、あの頃はまだ八ッ峰はアンザイレンして歩く人が多くて、この日も、どこかの大学の山岳部の人でないでしょうか、アンザイレンして歩いているのを、一組二組追いぬいて、八峰の下りの悪いところがあるんですけれども、これもなんとかごまかして、尾根筋に出たんですが、かえって尾根筋の方が悪いような気がしました。

そして、長次郎の右股の乗越のあたりがお昼過ぎで、剣の頂上は三時頃だったので、まあこまめっていうか器用っていうか、大休

止のときは中川さんは味噌汁を作ったり、みかんの缶詰でシャーベットを作ったりですね、ことに剣の頂上であずきアイス——ゆであずきで作ったあずきアイスをご馳走になったのは、甘い物好きの私には今だに忘れられない味でありました。

それから翌日は、まだそのころは工事が盛んだったものですから、隧道の中を冷や汗っていきますか、冷たい汗を流しながら隧道の終点まで着いたら、もう五時過ぎでインクラインが止まっていて動かないんですね。そうすると二〇〇mくらい歩いて下りなきやならない。中川さんは、浅野セメントに居られたのでその威力で、そのインクラインを動かしてもらい、大分楽をした覚えがあります。

山岳部は大正十一年、一九二二年の創立です。丁度今年は八〇周年になります。針葉樹の六号は昭和七年一九三二年ですから、丁度十周年、針葉樹六号の表紙には十周年記念号と書いてあります。この号の増山さんの編集後記を読んでみますと、「十周年記念号と銘打ったけども、十周年にふさわしいような、行事は何もできなかつた」と。そして「吉沢一郎氏の『今から10年前』の寄稿は極めて貴重な文字であるが、短文のために本欄に組みこむことが出来ず、止むを得ず『山小屋』

の初頭に掲げた」と、書いてあります。

それでこの「山小屋」の巻頭にある吉沢さんの「今から10年前だった」というその記事を読んでみますと、当時の汚い部室の有様と、部室に出入りしている人々の名前が出てまして、その他こうあります。

「何時、何処でどんな風に相談したか忘れてしまったが兎に角山岳会なるものが出来上る事になり、日本アルプスへ行く事が先に議せられ、その後で一橋山岳会といふものの発会式が挙行されている。ここ等はとも金田式らしいと思う」。そして、この年の六月二十日にその日本アルプス行きの話が話し合われ、金田さんがリーダーで、吉沢さんが第一班の第二隊に編入された、と書いてあります。

その翌六月二一日の放課後、化学室（木村さんの建物と書いてありますが）で、山についての講演会があり、木暮さんや榎さんが来ているようです。その話があつて、一橋山岳会の発会式が行われたと、あります。その化学室っていうのは、一橋にあった階段教室のことだと思えます。私どもの予科は石神井だったんですが、石神井の教室はバラックで、化学教室なんかありませんから、月に何回か、物理化学の時間は、一橋のこの階段教室に通ったもんです。神田に出るのがうれしくて、それが待ち遠しいくらいであります。

した。

そしてその時にこの部室に出入りしている人たちの名前を吉沢さんの文でみますと、「軍艦、あるいは飛行船頭の金田氏、孫さん、坊主の奥野氏、その他雨森氏とかいう人たち」と出てます。この金田さんっていうのは、私は知りませんが、古い針葉樹会報を見ますと、名誉会員のところに神戸外大の名誉教授、金田近二氏、大正一五年卒とあります。これは中川さんと同期ですから、おそらくこの人のことではないかと思えます。奥野さんと中川さんは、山岳部が創立された時の最上級生になります。

私が予科三年になりました昭和六年に、予科に入つて来たのは林俊介君一人で、私どもの同期は六人おるんですけども、安達とか中島っていうのはホッケー部のチャンで、普段は山岳部の用ができません。それで、山に行くのに仲間を集めるのにも非常に大変だった。それで私どもの仲間の一人、まあ決して悪い人ではないんですが、初対面の時の言動に、ちよつとおかしなところがあるのがおりました。それが吉沢さんの気にさわつたんではないでしょうか、「気分が合わないものは除名してしまえ、山岳部がつぶれたってかまわんと、吉沢さんに怒鳴られたことがございます。

ところが昭和七年になり、私達が本一の時には、望月、小谷部、杉浦、あとに塚本、森脇、小林。それから八年には鷲崎、佐々木、榎本、湯田坂、森川、西野。それから九年になると、原、柿原、小山、木村、岩崎、船本という一騎当千の連中が増えてまいりまして、私が卒業する時の送別会には、部員が三十人近く集まる、他の大学に引けをとらないような山岳部になっておりました。私の後に山岳部が盛大になったのには、望月君のマネージメントの力というのが大きかったのではないかと私は思っております。

針葉樹の七号は、昭和九年に私が編集しております。八号は昭和十年に林俊介君が編集しております。私の編集した七号は、六号と八号に挟まれて、ページ数も少ないし、中身も貧弱です。これが私の時代の山岳部衰退の証拠ではないかというふうに思うわけであります。

私は今日の話をするために、古い針葉樹をひっくり返して、事実が間違っていないようにちょっと調べました。針葉樹は創刊号だけは手に入れることができませんでしたけれども、だいたい二号から持っておるんですが、その中で、今まで知らなかったことがわかってびっくりしたんです。

例えば、如水会の山岳会というのが大正一

五年の六月一日に創立されておる。そして幹事長が江口定條さん、発起人や幹事の中に奥野さんや中川さんの名が出ています。江口定條さんというが如水会の初代理事長です。初代と二代と四代をやってる方です。そうして、国分寺に随宜園っていう別邸を持ってまして、山岳部の連中がご招待を受けたこともあったようです。

それからもう一つ、針葉樹の二号にですね、江口さんが寄稿されております。それから先ほどお話し上げましたスキーマの芳賀が、札幌郊外の定山溪温泉から奥無意根の奥の方に入ったところに「奥無意根小屋」という立派な山小屋を持ってました。看板は、江口さんの揮毫だとそのとき奥野さんに聞かされました。私は何気なしに聞いていたんですが、あとでどういうわけで江口さんがそんな山小屋の看板書いたのかなあと思ったら、如水会の山岳会の幹事長だった。そういうことがわかってなるほどなあと思った次第です。

私が針葉樹会の例会に出るようになったのは昭和五年からですけども、そのときの古いのを見ますと、針葉樹会の例会というのは昭和四年の六月に復活したと、こう書いてあります。私はその昭和五年から、だいたい卒業の昭和十年までほとんど欠かさないで例会に出ておりましたけれども、如水会に山岳会が

あることを知らなかった。ということはこの如水会山岳会はそんなに長く活動を続けられなかったんでないかと、こういうふうに思います。一番先にできた如水会山岳会の名簿には、上田貞次郎の名前が会員として載っております。

私は卒業してすぐ、三井物産に入って門司に行ったもんですから、針葉樹会の例会の記憶っていうのは学生時代のものが非常に強く残っております。その時の例会というのは、食事をめいめい済ましてから、決められた部屋にぼつぼつ集まって、もちろん山歩きの報告とか計画などが出ますけども、特別に決まった行事っていうのがあることが少なく、雑談が主体でした。主役は、中川、吉沢、松木、近藤、村尾、渡辺というところでしたが、こう背をぴんと伸ばして、ちよつと鼻にかかると澄んだ（声の）中川さんの立て板に水が、主役中の主役であったのは間違いありません。この例会への出席が非常に楽しみでありました。



会員数が今のようになくなりました時に、昔の針葉樹会のような例会を期待するのは無理だと思えますけども、年に一回や二回の会合では寂しいなあと私は思っております。ところが、今月頂戴しました会報を読みますと、

一木会という、毎月第一木曜日に集まるという会が二月からできたようで、非常にいいことだと思いました。そして、古い人と新しい人が、そこで意思の疎通をはかり、単なる同窓会の集まりでなくて、心のこもった付き合いの出来る集まりになることを期待いたします。

今日私が申し上げたことは、山岳部に入ってから七〇年以上経っておりますけども、いつも忘れたことのない山の思い出で、それに多少の自慢話も加えてお話ししたわけでありませう。今日のこの私の話を企画された石原会長さんや幹事さんのご期待に答えることができたかどうか心もとないんですが、一応これで私の話を終らせていただきます。長時間のご清聴ありがとうございました。(拍手)

【編集子注】 本稿は6月26日行われた総会時の講演の録音テープから宗像氏(平12)が文章としてまとめたものを最終的に堀岡会員が若干の加筆と修正をされたものです。両会員のご協力、有難うございました。

## ネパール・ネワール族の成人式

横山 皖一(昭27年)

私の友人アマール・マリさんの招待により彼の娘の成人式に参加する機会を得たので、その話を紹介する。

ネパールの人口約2千万人の内、カトマンズ地方に約150万が住む。ネワール人は約45万人でチベット、ビルマ語系のネワール語を家庭で使って、ネパール語を国語として認めていない。

ネワール族は、カトマンズ盆地を中心にしてその周辺を統治していたが、グルカ系シャハ王朝(1761年〜)のときにネパール全土を統一し現在に至っている。

ネワール人は約半数がカトマンズ中心に住み、商業、官庁勤めが多く、他はカトマンズ盆地に分散している。宗教面では土着信仰と古くインドから伝わり、ネワールのに変化した仏教とヒンズー教が混在しているから、ネワール人は仏教の祭りもヒンズー教の祭りも共に参加し楽しんでいる。



ネワール人は男性、女性別に成人式を行っている。男性は10歳前後で頭を剃り、パンツ一枚で鹿皮の物を身に着け、お坊さんの説教を4、5時間聞けばよいのだが、女性はいろいろと面倒な手続きが必要になっている。メンスが始まる前の9〜12歳に太陽の神との結婚式を行うのである。式前に12日間の潔斎

が必要になる。この期間、太陽の光、男性、自分の姿を見てはいけない。このため部屋の窓、トイレの窓には黒い布が張られ、鏡は取り外される。

初日は吉日を選びヨーグルトを飲んで部屋に入り、始めの3日間は、塩、卵、肉、魚類を食べることができない。4日目から米の粉と薬草を粉にして塗る。親父さんはこの間、娘の顔を見ることができない。12日目、家族、親類一同とマリさん宅の屋上(5階)で待っていると、飾り物をつけて外に出て、少しずつ飾り物を取り、太陽の下に出て太陽にミルクを捧げる。ここで結婚式のための女性のお化粧をして太陽神との結婚が済んだことになる。それから家族一同でお寺に行き、お坊さんの説教を聴いて終わりになるのだが、親父さんはこれからが大変である。親戚、知人、関係者を集めて、娘の成人式を披露する。私の友人、アマール・マリさんは300人くらいをよんで、大パーティを行った。友達の友達、又その友達などが寄り合って午後の3時から10時過ぎまで続いたそうです。この友達の人に誘われて、日本人も一人来ていました。私は36枚のフィルムで多くの参加者の写真を撮り、スコッチウイスキーをゴチになり、ネパール料理を食べて6時頃にホテルまで歩いて帰りました。

## ツール・ド・シルクロード

(自転車でシルクロードを走る)

春日井 実(昭32年)

針葉樹会報にツール・ド・シルクロードをリポートするのは、これで3度目である。

そろそろマンネリかと思いい、編集長に相談したら続編をとのことであった。

今年のツール・ド・シルクロードには2つの異変があった。

その第1は昨年9月のNY同時多発テロである。昨年、我々はウズベキスタンの東端にある首都タシケントを出発して、サマルカンドを経て同国をほぼ横断して古都ブハラに到達した。その3週間後にテロは勃発した。アフガニスタンに国境を接する今年度通過予定地のウズベキスタン、トルクメニスタン両国の緊張が高まった。

外務省が国別に出す危険度の指標も1ランク上がってしまった。旅行社は勿論逡巡するし、安全第一をモットーにしてきた我々も考え込んでしまった。

一時は中止の意見も出されたが、この危険な地域はひとまず後回しにして、安全が確認されてからいずれ走行することにして、今年シルクロードの別な所を走ろうはないかという決断になった。

案として第1年目の西安〜蘭州間を走っている人が、今のチームに一人しかいないのでこの区間を走る、ウルムチからステップ・ロード(天山北路)を走ってみたい、安全面から





トルコが良いのではないか等意見が出されたが、会員間の電子メールによる討議とアンケートで今年の2月にやっとトルコの中央アナトリア高原のカイセリからイスタンブール迄と決まった。

第2の異変はこの会の発起人の一人で事務局として活動し、毎回の走行時には隊長を勤めてきたNが突然退会したことである。この会では昨年9月に「駱駝によるタクマラカン砂漠の横断」もやったが、この時もNは参加したが隊長ではなく、その時の行動が後から隊員に批判されたのが理由らしい。対外的にこの会を代表していたし、実は西安からブラ迄の全行程を走破しているのは彼一人だっただけに、何故という驚きと同時に大きな混乱を会にもたらした。

そんな状況下ではあったが、7月24日の出発にどうやらこぎつけた。

私の唯一の不安は今年は6月のサッカーのW杯や、7月の雨で昨年の半分も練習ができていなかったことだ。

総員36名の隊員に対し空港で新隊長から、脳梗塞で一人倒れた昨年の事もあるから（フランスから特別機を呼び空輸した）「あまり頑張らないように」と挨拶があったのが異例であった。

イスタンブール迄の12時間は長かった。所

謂エコノミー症候群（ファーストクラスでもなるからロングフライト症候群というべきらしい）にならないように、酒類を控え水分をとり、時々後部へ行って体操をしてきた。

カイセリ迄は乗り継いで更に1時間。ホテル到着は夜の12時、日本時間では翌朝の6時であった。

カイセリでまずやる事は、地元のエル・ジェス大学の日本語科に各自5冊ずつ持ってきた日本語の図書を寄贈することであった。これは毎回行ってきた国際交流の一環である。

我々の隊には4つの役割班、即ち庶務、衛生、記録、整備・走行班があつて、いずれかに所属して役割を分担しなければならない。

私は今年は庶務班で国際交流を担当したので、最初の役割がきた。

羨ましいくらい広いキャンパスを持つ大学で日本女性が3人働いていた。文学部の校舎は地元の有力者の寄贈でその人の名前ついているが、中身のパソコンやラボの機器は日本のODAによるものであった。学生は120人いて、その内の一人の女学生が今秋筑波大学に来る予定だという。

大学の訪問を終わり、バスでカッパドキアへ向かった。このバスで私は2、3回のサイクリングで一緒になり、顔見知りではあったT嬢の隣に座った。日本での走行では並走が

できないので話をしながらというわけにはゆかないので、それ程親しいという人でもなかった。

彼女は今回が初参加であった。カッパドキアへ行く迄の道程で、彼女の父は佐渡ヶ島の郷土史家で、彼女も父の血を引いて歴史と芸術に興味を持つと同時に、中学生時代は陸上の短距離の選手で、大学は佐渡ヶ島ではそれしか知らなかったという中野の女子美のデザイン科に入った事が分かった。

女子美といえばクラスの友人で演劇に熱心な男がいて、鈴木克ちゃんと共に誘われて彼が音頭をとる劇団「からしの会」に参加して、その会が女子美とタイアップした事を思い出してそんな話もした。

デザインとしては三越劇場の緞張を手がけた事もあり、今は音楽家の舞台写真を撮る仕事を専門にしているという。

その日の午後と翌日は、天下の奇観カップドキアのきのこ岩や洞窟教会、地下都市の見学に費やした。私は興味がなかったが、トルコ石の専門店にも立ち寄った。彼女はペンダントを娘のために買ったという。彼女に娘さんがいることが分かった。

この日の夕方ホテルの中庭で自転車を組み立てた。

## ●7月27日 走行第1日

今日からは4時起床、5時朝食、6時準備体操後出発のスケジュールになる。

35度を超える午後の酷暑を避けるためなるべく午前中に走行を終わりたいからだ。最初から7kmを超える長いきつい坂があった。着いた峠は昨日バスで寄ったきのこ岩のあるところであったが、もう景色を見る気力も残っていないかった。

しかし、この後の下りは快適だった。W杯での日本チームの応援歌「アイーダ」を口ずさみながら、奇観の中を走り抜けた。だがそれも長くは続かずアップ・ダウンの繰り返しとなった。

3回目の休憩の後の走行でいつの間にか中団からビリに落ちてしまい、しんがりの走行班長に激励されながらの走行となった。

次の休憩の後はトップのすぐ後ろにつけてもらった。この時トップを引いたリーダーはH氏で後ろを走る人のペースを見ながら走ってくれるので、この人がリーダーの時はこの位置で走ると楽である。坂はあったが2区間ほどこの位置を持ち応えた。

次の休憩の後、嫌になるほどの長い坂にくわした。しかも強烈な風速7〜8mはありそうな向い風である。体重の軽い身には応える。トップ下の位置からずると落ち、い

つの間にかまたビリになってしまった。この日走った34名のうち既にバスに乗った4名と走行班のリーダーを除くと28名に長い坂道で追い抜かれたことになる。その中には女性も7〜8名含まれていた。

次の休憩点はキャラバン・サライ(隊商宿)の遺跡のある所であった。走行班長に「これでイエロー・カード2枚目ですから、退場です」といってバスに乗ることにした。

昨年、一昨年は一度もバスには乗らず完走できたが、今年是最初の日からこれである。事前の練習不足か、やはり年のせいなのかなと思った。

第1日の走行距離は98kmであり、キャラバン・サライ迄は77kmであった。

今年は全走行距離が長い割には日程が短いので、一日の走行距離が昨年・一昨年よりは長く100kmを超える日が何日もあったので、完走は到底無理だろうから一日に80kmも走れば満足と思っていたのであまり後悔はなかった。

## ●7月28日 走行第2日

この日は琵琶湖の3倍あるトウズ湖という塩湖の傍を通過した。湖の傍を通るので、当然昨日のようなアップ・ダウンはない。湖で途中下車し小休止した。乾期なので辺り一面

は真っ白で雪景色のよう。

結婚式の新郎・新婦が来ていた。どこの国でも塩は清浄なものとみられているのだろう。一緒にお祝いの踊りを踊った。

この日はゴールのモーターへ着く迄に14kmも走った。到着時間は4時半であった。暑い盛りの中を走ったが、完走できたことで自信が甦った。

一方、新隊長のGさんは日本にいる時に自転車で電信柱にぶつかり、肩の骨を骨折していたので全くの練習不足で、足の痙攣を起しリタイアしてバスに乗った。

こういう楽しみ方もあるのだと皆に薦めていた。この人は内装工事会社の社長で第2回以降の皆勤者の一人である。毎年20日以上夏休みを部下に率先して取っている事になる。偉ぶったところもないしユーモアも巧みで、社員には尊敬され信頼されているからこそできる事なのだと分かる。

この人にまつわる面白いエピソードをひとつ。一昨年タシケントにゴールした時、隣の洒落たホテルのナイトクラブへ5、6人で民族舞踊を見に行った。この国の習慣として踊りにチップを投げるのであるが、10ドル分の現地紙幣だと厚さ2センチ位の札束になる。投げるにはコツがあって、帯封をとり札束を折りまげてやおら立ち上がって踊り子の頭



上の天井目がけて投げるとハラハラと雪のよ  
うに踊り子の周りに落ちてくるわけである。  
それを知らないGさんは座ったままで1セ  
ンチ分位を、気前良いつもりで投げたらなん  
と自分の足もとにパラパラと落ちてしまった。

勿論ボーイが踊りが終わった後、しっかりと  
かき集めていたが。

ついでだがこの入場料は日本円でたった  
の800円であった。

彼は翌年タシケントが発点となったので、  
昨年の汚名雪辱とばかりに、大金を懐に入れ  
乗り込んだがもうその店はずぶれていた。

### ● 7月29日 走行第3日

この日はアンカラへ入る日。アンカラは山  
に囲まれた盆地にある。ということはここに  
入るには坂道を登らねばならない。

登り切る前に一人、血圧が下がりリタイア  
した。血圧が高いので、朝、降下剤を飲んだ  
が、一度飲んだのを忘れ2度飲んだらしい。  
身体をいたわってか、休憩時に何時も一番涼  
しい木陰にちよこんといふ人だ。

ホテルへついてからすぐに隊員の看護婦さ  
んが診て病院へかつきこんだが、こういう時  
に隊員のなかに2人も看護婦さんがいるのは  
心強い。

アンカラ市内では先導するパトカーが、渋  
滞を避けるためにトンネルのある急坂を通つ  
たために、登り切れないで下車する人、それ  
にぶつかる人が出て列が乱れパニックに陥る  
一幕もあった。

アンカラでは私は個人的にいい経験をした。

トルコがW杯で3位になった記念切手を街  
に買いに出たら、妙齢の女性に声を掛けられ  
た。アンカラ大の英語の先生だという。

日本で行われるリーダー養成スクールの申  
請書を出しに行くところで、その用事につき  
合った後、自分の所属するユース・クラブや  
市内の色々な所を暑いさなか案内してくれた。  
この人も試験に合格すれば日本に来る可能性  
がある。

アタチュルク（建国の父）の銅像の前で記  
念写真を撮ったが、大変な美人である。これ  
も小さな国際交流である。

その翌日は国際交流班の第2の仕事で、老  
人ホームの慰問があった。こちらも結構老人  
といってもおかしくない連中が多いのだけれ  
ども、このツアーでは初めての試みとして取  
りあげてみた。

トルコの旅行社のユーシヨフさんの通訳で  
私が会を代表してご挨拶をした。

1カ月の年金の半分くらい（3万円位）で  
ホームに入れるらしいが、我々が途中で泊  
まったホテルよりはましのようなであった。

我々は自転車を担いで行くので、重量制限  
があり大きなお土産は無理なので、知恵を絞  
り日本の風景の絵葉書とうちわ、それにイス  
タンブール迄の機内で手分けして折って貰つ  
た鶴を「これはトルコが3位になったW杯の

決勝戦の閉会式の時に空から舞い降りてきた鶴と同じものです」といって一人に2羽ずつあげて喜ばれた。

合唱、草笛それに日光のわらこ踊りを全員で披露した。

アンカラには2泊した。どうしても仕事のある看護婦さんと大学の講師をしている2人の女性が帰国し、TVマンの男性が参加した。この人も何時も仕事の関係で半分しか参加できない。

#### ●7月31日 走行第4日

昨日の渋滞に懲りて安全のためにバスで町外れまで行った。ここは一昨日通ったのでルートが途切れる心配はない。パンクが多くなり、疲れが出たのか転倒も多い。

120km走った所で2時になったので今日の走行は打ち切り。今日も完走できた。

旅行中はずっと二人部屋だが、今日は我々の部屋に大勢来た。部屋の中ではパンツ一丁だが、通りかかったT嬢を含む女性3人も入って来たので、慌てズボンをはく。

ついでに触れるが、今回夫婦で来ているのが3組あるが、夫婦でも部屋は別である。

外は暑いし、モーターなのでビールは売ってないし、洗濯位しかする事がなく、皆夕食までの時間をもてあましているのだ。朝が早

いので昼寝をする人もいるが、寝過ぎて夕食までに起きられないこともある。

喋っている人と人柄が分かって面白い。走行リーダーのHさんは私同様、数年前に奥さんを亡くされたが、しまなみ海道(尾道〜今治)で伴侶になる人と巡り会い、今回は一緒に来ている。

宿へ着くとまずビールを探しに飛び出すのが、失敗したことがない。筋肉の引き締まった体格で、この人が先頭の時が一番走り易い。見かけによらず観察力の鋭いしかもユーモラスな文章を書く電子メールの常連である。自転車のことは何でも知っているので、何時もお世話になっている。

#### ●8月1日 走行第5日

昨日走行を打ち切った所までバスで戻る。

すごい登り坂が残っているのが分かっているので、途中でバスを降りて待ち伏せしようかと思っただが、バスの席が指定席のように隣になるT嬢から「走りましょうよ」といわれるとついその気になってしまう。

しかし、やってみると朝のうちで涼しかったせいがかすんだり登り切れた。

血圧の心配があつてバスに乗っていたT氏がまたおかしくなり、イスタンブールへ先に車で送ることになった。この日の出来事とい

えばそれくらいで、毎日地平線が眺められて気分がいい。いったい何キロくらい先まで見えているのだろうか。面積が日本の2倍あるというトルコは雄大ではあるが単調でもある。そういえばこれは全部麦畑であるというが、半分しか耕作してないという。

我々が走っている側道も日本の2倍はあるが、実はこれはトラクターの専用道路だという。我々が走る道路はアンカラからイスタンブールへ行く幹線道路の一つであるだけに交通量が多く、この国ではパトカーが3台ついでくれた。

ウズベキスタンではタシケントの交通部長が一台のパトカーで最後まで先導してくれたが、ここでは10kmくらいでパトカーは交代するし、町によっては十字路毎に警官が出て、横からの交通を遮断してくれる。我々のために動員された警官は述500人は下らないと思う。今日もお陰様で115kmを完走できた。

今日のホテルもイスラム系なので、ビールが夕食時に出ない。遺跡のある街と聞いていたので表に出てみたが、遺跡らしいものは見当たらずビールだけ買って戻る。

500ccの缶ビールが一本100万リラと聞くとびっくりするが、日本円ではたったの80円である。紙幣の数字は後ろ3桁が小さ

く書かれているが、それでも大きな数字なので一瞬とまどう。

### ●8月2日 走行第6日

標高約1200mのアナトリア高原もやつと終わりに近づき、下りが多くなったので「アイダ」を口ずさんだりした。ブルサという古都に向かって走っているの、込みだし、渋滞流しのため道路わきによける事が多くなった。

12時頃雷雨となりガソリンスタンドへ避難。すぐにあがったので走りだしたらもっと強烈な雷雨に遭遇。路面が水びたしとなり危険なので、走行打ち切り。それでも今日は15km走った。

バスで古都見学に行く。日光わらこ踊りのリーダーGさんやT嬢等と由緒のある絹専門のバザールへ。Gさんは湯元の旅館主。お土産用としてスカーフを10枚もまとめて購入したので、皆もそれに便乗して安くしてもらう。

### ●8月3日 走行第7日

雷雨で走行を打ち切った地点まで戻る。そこ迄はバスで下って行ったので、当然登りでスタート。今日の先頭はHさんなので安心だ。実は昨日の先頭Mさんには、初リーダーの気

負いから、朝っぱらから時速24kmで飛ばし往生した。

しかし12kmも続く長い坂には、脱落者続出。つづく長い下りでこの人達は復活。また次の長い登りで脱落の繰り返し。登り切った所でマルマラ海が見えた。感激の一瞬である。長いシルクロードの道中で海を眺められたのは、もちろん初めてである。

砂漠、山岳地帯、草原、高原と大地を走り続けてきたが、やっとその果ての海にたどりついた瞬間であり、茫然となった。しかし先導のパトカーはそんな感激も知らずに休憩もせず走るのが悔しい。そうこうするうちにまた山あいに入り海は見えなくなってしまったではないか。

西瓜タイムがあつたりして、元気を回復して今日の走行予定を25kmも超えていっきに波止場まで下る。これが後から問題を起こすとは露知らずに。

フェリーにバス・トラックを乗せるので自転車を解体して、ヤロバのリゾート・ホテルへはバスで行く。

途中から意味が分からないままに、警官がバスに乗り込んでくるし、格好いい婦人警官が白バイで先導するので国賓待遇だと喜んでいたら、警察署前に誘導され署長から無許可で波止場まで走行したことにしてお小言を

頂戴した。

明日の波止場までの25kmの走行と自転車の解体に要する2時間の節約ができると思つての事だが、ここまですつと警備をしてくれた警察の好意を無にしまった事を深く反省し、お詫びをした。

### ●8月4日 走行第8日

マルマラ海の最奥部をフェリーで渡り、アジアとヨーロッパを繋ぐ回廊状の地帯を50kmほど走る。イスタンブールの対岸で歌で有名なウシュクダラに着き、今度は自転車毎フェリーに乗りボスボラス海峡を渡る。自動車専用橋であるために自転車での走行許可は結局下りなかったが、東洋・西洋をむすぶ巨大な橋を目の当りにした。

波止場で隊列を組み直して、いよいよラスト・ラン。最高齢の私がトップになる。

ゴールのアヤ・ソフィアを目指してパトカーの後を走るが、急な石畳みの道路をいっきに登るのが最後の苦労だった。登り切ったところでもう一度隊列を整備して、ローマ時代には戦車の競技場だったというヒポドロームを観光客の声援を受けながら一周してゴールへ向かった。

ブルー・モスクへ移動し、隊長はここで新聞社・TV局のインタビューを受けた。



イスタンブールにゴール。右手前が筆者

今までの中央アジアと違い我々の事は、度々報道されていた。翌日髭面の副隊長はバザールでサインを求められたようだ。

全行程850kmの旅は小さなハプニングはあったが無事に終わった。私もどうなることかと思った初日を除き完走できた。

来年はこの先バルカン半島を北上するのか、

もとに戻ってブハラから西進するのか分からない。

### ●あとのこと

翌日は名所・旧跡の多いこの街をバスで観光した。

初参加なのに完走をした隣席のT嬢にこんな長旅でホームシックにならなかったかと聞いたら、「全然もつと走り続けたいくらい」と頼もしい答が返ってきた。

午後は殆どの人がハマム（トルコ風呂）に行ったが、彼女と私は行かずにローマ時代の水道橋と素晴らしいフレスコ画のあるカリア・ジャミーへ行った。彼女はここで写真を撮りまくった。無人のモスクにもぐり込んだ。

裏町で1kg300万リラのいちじくを買い、ソフト・クリームを歩きながらなめる。積極的に好奇心旺盛な彼女のお供をしていると、「ローマの休日」の新聞記者になったような気分になった。

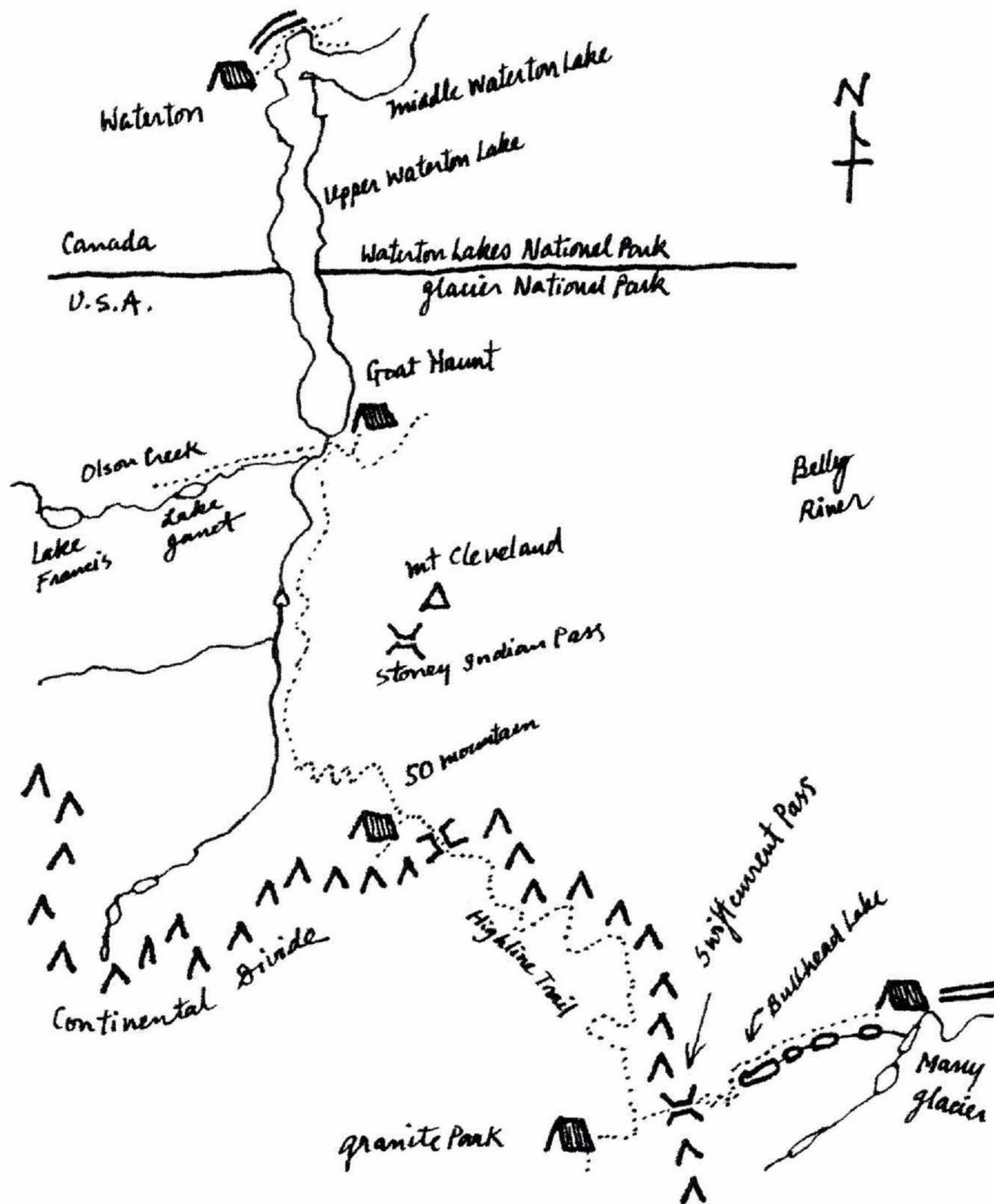
バザールにも付き合った。ここでの買い物はトルコ・チームのユニフォームが息子用で、最後に買ったネクタイが夫用だという。彼女の家族構成が最後に分かった。

### 氷河公園北部徒歩き

加地 幸雄（昭33年）

アラスカを除く米国大陸分水嶺は、氷河国立公園が北端、公園の中央を紆余曲折しながら南北に走る。この分水嶺線に付きつ離れつ南下する百哩余の道程を三分して、第一歩は国境からとする。時は1996年。以前から同行することになっていた娘が同行できないので、仲間を探していると、昔馴染みの友達シャーリーに云うと、行こうと乗気。では、という話になったが、実は聊か虚を突かれた感じだ。彼女は体躯もよいし、自然も愛するが、backpacking（注1）は未経験。責任がかかって来る私の経験はというと、1970年代以来空白が続き、脚に往時の覚えがあるのみ。単独行は控えるべし、といわれるグリズリ熊の出没する山も経験浅く、自信を欠く。しかし、本来山好き、大陸分水嶺縦走の企画に緒を付けたい。氷河公園の奥地も探索したい。希望と心細さの交錯した出で立ちであった。

1996年9月4日 カナダのウオタトン国立公園の観光町ウオタトンに車を乗り入れた時は、既に夜の帳りが下り、町の灯が雨にかすんで、ひとけなし。町はずれに、テント



も疎らな幕営場を見つけ、雨滴の音を耳にしながら、寝袋入り。

9月5日 入山許可を得るため、公園管理

案内所に、早目に駆けつけたが、2、3時間後、米国側氷河公園管理所と辛うじて連絡がついた。結果は、行程上の奥地 backcountry 幕営地2ヶ所が3日待たねば空かぬという。これらの幕営地は奥地環境保存のため、極めて制限しているのを、はじめて知った(規模は、最少2組、最大5、6組、1組最多数5人と覚えている)。

非常に良い規制だが、当時無知な私は、今日入山と、意気軒昂、そこに水を掛けられ、計画挫折の感だった。雨の続いたレーバ・デイ(注2)過ぎに、入山者がそれ程多いとは思われなかったし、3日待ちも全く意外。余儀なく、ゴート・ホント(羚羊のたまり場の意)というウオタトン湖南端の幕営所で、2日3晩待機することにし、避熊対策のビデオを見て、正午過ぎ入山許可を得た。

そのビデオで熊除けに持参した噴霧器を、カナダ入国地点で、武器として没収されたのを思い出した。前日の夕暮、その、冬は通れぬ小さな関所にさしかかった際、閉関の寸前であったので、役人に迷惑がられ、没収されたになったのかもしれない。とにかく、通過に安堵の胸をなで下ろし、噴霧器のことは、忘れていた。

ウオタトンからゴート・ホントへ走る船は、季節はずれの1日3便。次便まで3時間程あ

るので、燻製の鮭のオムレツをシャーリーに御馳走になってから、小止みを利して、別れ別れに散策した。私はスケッチブックを片手に、高台に登ると、足下にウオタトン湖が横たわり、冠雪の峯々が暗雲を衝き峻を競っていた。一方勝景に打たれ、一方この山並みを、重荷を背にしてこなせるものか、心許無い。

実は、ウオタトン湖西岸沿いに、ゴート・ホントに通う山路がある。カナダ国境から大陸分水嶺を南下する者にとって、定石はこの山路であろう。船上入国とは聊か後ろめたい。だが今日歩けば、国境付近で野営、ゴート・ホントは翌日の午過ぎになろう。悪天もある。徒（かち）入国にはいずれ再起しよう、との頼りない言い訳で船にした。現に6年後の今日、分水嶺縦走は南下継続の意強く、徒入国は意図外。しかし、拘泥り性と見えて、その後ろめたさ、未だ消え去っていない。

船の甲板は、雨まじりの風強く、人影なし。途中両岸の森林の中に、無木帯が、湖岸から斜面を上り、雲裡に消えるのを見た。国際境界線だ。誰にでも森を歩けば横切れる国境界線だから、無木帯の維持費は無駄に思えるが、東西二大洋に及んでいるという。無防備の一大国境は、二国間の平和の賜だし、両国のウオタトン湖公園と氷河公園が、20哩にわたり隣接しているのも好ましい。それにしても、日

本の無条件降伏は時を得ていた。ロシア軍は、猪突の勢いで、満州を横断して来たから、寸時宣言が遅れていたら、敗戦後ロシアは日本の一部を管理し、日本本土は二分されていたかもしれない。ドイツ統一は半世紀を要したし、北鮮と南鮮は、いまだに睨み合っている。国際平和の重要さに胸を搏たれる一景だった。

湖の南端ゴート・ホントの棧橋に降り立った船客は、私たちを除き、僅か3、4人だったが、間もなくその人達も、ウオタトンに引返す船で去った。私たちは、予約済みの野営場に向った。1時間程、雨中うろうろ捜したが、見付からない。濡れてくるし、荷も重い。諦めて、管理人 ranger の家の扉を叩き、棧橋近くの避難所3泊の許可を得た。公園管理人だが、入国検査員も兼ねている。棧橋横に待合室、炉と洗濯室があり、その洗濯室は、鉄扉のコンクリート造りなので、熊除けの食糧置場（注3）として使える。避難所とは、一側面空いたコンクリートの函を4つ並べたもの、その1つには、炉に焚く、長さ8尺ほどの丸太が満載。横なぐりの雨のとどかぬ一函の奥にテントを張った。夕食後、雨上りに、シャーリーは湖岸の散歩に行った。熊出没のため、暗闇歩き、一人歩きは避けよ、との ranger の忠告もあったが、彼女は無頓着。行く先が思いやられる。また、後に分ったこと

だが、権威に逆らう、無政府主義の一端でもあった。

**9月6日** 冷雨の中、ウオタトン湖東岸の山へ向った。肩慣らしということで、重荷を背負う。中腹のみずうみ展望地点まで山道を辿る。羚羊や大鹿 elk の好むイトラン beargrass が群生している。雲霧にとざされて、湖面は見えない。展望台で雨に打たれ乍ら昼食中、一瞬日が射して、虹がかかった。行程3哩。

**9月7日** 元気のよいシャーリーの提案で、雨上りに、西方のオルソン谷を歩く。雨水で垂れた道沿いのやぶを分けて進み、腰まで濡れる。この点シャーリーには長脚の利がある。上流のフランシスコ湖まで行こうと思っていたが、途中のジャンネット湖を過ぎた地点で、寒さに歯をガクガクさせながら、昼食を嚙り、引き返した。谷の南の稜線は、暗雲のかけ。中腹の薄白い急斜面が、見え隠れした。前日の谷の雨は、山では雪。行程8哩。

夜半に、5人組の若者が到来した。一同濡れ鼠。避難函から丸太を10本程運んで、船着き場待合室の炉に火を入れてあげた。きくと、今朝ベリ川から入山、ストーニー・インヂアン峠越えは、激しく吹雪かれたという。手袋な



どの冬支度無く、よく凌いだものだ。5人の年数を合わせても、私たち二人の年数に至らぬ。若さは強い。

**9月8日** 曇天。この日は、試練の路程と見ていた。ウオタトン湖は標高4196尺、モンタナの分水嶺路で最低の地点。そこから10哩半で3000尺の登りだが、その3分の2を僅か3哩で分水嶺近くまで突き上げる。ユタの塩湖城近辺では、5000尺の登りもあるが、日帰りだから、荷が軽い。とにかく、この日の試練は成敗の分れ目と士気高揚、7時頃出で立った。吐く息が白い。

胸突き場は、懸念した程ではなかったが、荷、肩に重く、道のりも捗らぬ。急坂を後にし、樹線を越えたひととき、暗雲切れ、薄日を背にした冠雪の連山を遠望した。このあたりを50マウンテンという。名の通りだ。観山入神の感一入。時折、霰のつぶてに打たれるのも、心地好かった。

終日閑静で、行き交う人もない。野営場へおけると、テントは疎ら。荷を下ろして夕食の支度をしていると、例の5人組が到着した。11時半頃ゴート・ホント出発という。若さは強い。

テント場はずれに、16、17尺の鉄棒が立っていた。その先の鉤に、地面に横たわっている

もう一本の鉄棒で、食糧袋を掛ける。熊から守る仕掛けだ。掛け終わって、微かな余光の中、テントに帰った。

**9月9日** 両面が氷河に削られたアレートがなす大陸分水嶺は、南東に走り、ハイラインと呼ばれるこの部分の分水嶺路は、上りつ、下りつ、アレートのツンドラ南西斜面に行く。往時の氷河の残りが、稜線の北東面に点在しているが、私たちの歩いた南西面は、既に消え去った。

50マウンテンの出で立ちで方角を誤り、遠道したが、やがて幾重に折れる踏跡を辿って、分水嶺に至った。初顔合せの実感があったが、強風に馳す濃雲に包まれ、視界ゼロ。20、30尺先、岩みちを行くシアリーの影が薄い。標高7450尺（私の教えるユタ大の裏山ほどだが、今回の山行の最高点だ。ゴート・ホントに近いクリーブランド山の10466尺が最高だから、氷河公園の山並みは、高いとはいえない。ただし、氷河の爪痕が厳しく、樹線もユタより3000尺低いから、数字に不相応な高山感を醸す）。

小さな谷川を横切った時、間違いをしでかした。飛石が点々としていたので、小走りで勢をつけたはよいが、足が滑り、次の足が岩に蹴躓いた。背負いの荷の惰性に圧倒され、

ハツと気が付いたら、顔は水の中。起き上り、シャツやズボンから水が吐き出た。氷水だ。幸い川浅く、背と荷は浸らなかったが、風に晒され、歯の根の合わぬ一昼一夜を送る結果となった。

帰宅後、山行入門小冊子のくだりに、"Take each step in the stream slowly and deliberately. Plant your forward foot firmly before moving your rear foot. Never hurry." (Hints and Tips for Better Backpacking, Rodale Press, 1996, p.13)とあったのを、恨めしく目にした。それ以来、ズックのズボンは穿かず、特に乾きの早い身拵えをするようになった。その場のシャーリーはというと、靴だけ濡らして、一步一步涉って来た。

日傾く頃、雪溪に前途を遮られた。エイハ・ドリフトという。既にカナダの係人に、危険だから、下巻きに歩いて避けるよう、警告されていた場所だ。数年前、娘のみよを確保するため、ザイルを用意した場所でもある。（会報92号、p.16参照）。それ程急ではないが、雪が固くて、殆んど蹴込みがきかない。下を見ると、雪溪は百米程で消え、伏流が白く泡立って流れ出ている。スリップすれば、下のガレを打つだろう。だが、シャーリーにとつては、係員の警告など、馬耳東風。私の勧め



Loosely southward  
over Watutan Lake  
Goat Haunt at the lake's farthest end  
10 ix 96

も耳にしない。例の権威拒否・反抗の一端である。四十を過ぎて青春反抗期でもあるまいに、と思ったが、できるだけ蹴込んで先導するよりなかった。

雪渓を無事あとにして小1時間、疲労も重なって来た。大丈夫か、荷を少し担いであげようか、と訊ねると、シャーリーは、男強女弱観は、男尊女卑に因る、反省してくれ、と応える。抗議しても、承知しない。実際、庇う気は、ある種の自信、自負によるのは否定できないし、その裏に、男強女弱観が潜んでいるかも知れぬ。その自負を虚勢とは、諒とし難い。それも自負心の働きらしい。

目的のグラニト・パーク野営地はハイライン路から少しはずれた木立の中にある。シャーリーは、下りは膝が痛むから、先に行ってくれという。では一足お先にと下ったが、行けども野営地が見当らぬ。疲れた足を引摺るように歩いて行くと、制服を着た公園管理人に出遭った。訊ねると、丁度行くところだから御一緒に、という。

やがて、私が見逃していた分岐点から野営地に至ったが、ザックだけあって、シャーリーが居ない。荷を下ろして、私を捜しに出かけたのだ。管理人は、親切にも、私に待っているように指示して、シャーリーを捜しに出かけた。私は、テントを張って、岩に坐り、待つ

ていると「シャーリー、シャーリー」と呼ぶ声が暗闇の森の中に消えて行った。グラニト・パークの名は聞えが好い。1913年に建てた、近くのシャレーの客呼びを意図した命名らしい。だが別名のモリング・メドウ(掻き裂き牧場の意)にもあるように、グリズリ熊のたまり場。人の指の大きさの爪は、一撃で重傷を負わせる。現に、1980年代に3人、このキャンプ場で、テントから引きずり出されて殺された。程なく管理人が、シャーリーを連れてあらわれ、安堵の胸をなで下した。お互いに、この山道で分れるのはやめ、といい合った。

隣にテントを張った3人組が、管理人に問われ、奥地野営許可証は落して失ったと答えた。しかし、管理人の無線電話で、嘘が露見し、月のない暗夜にもかかわらず、下山せよ、という。取締りが厳しい。私は、テント区画を共有するから、今回は許してと願うと、承諾してくれた。夕食後、食糧袋を吊して帰って来ると、空いた隣に、例の若人5人組が来ていた。聞くと、彼等は今日も、私たちの1日の道を半日でこなしている。若さは強い。テントが接している3人組は静かだったが、隣の5人組は夜半まで喋り通し、私はなかなか寝つかれなかった。だが、人数が熊除けになる得はある。体温で乾かそうと、ぬがなかつ

たズボンも誤りであったかも知れない。行程、初端と末端の迷い歩きを入れて、12・4哩。50マウンテンとグラニト・パークは同高度だが、登り部分を通算すると2500尺。

9月10日 いよいよ下山となって、初めて晴天、日のぬくもりが心地よい。南下するハイライン路と分れ、東行、スイフトカレント峠で大陸分水嶺を越える。ハイライン路はこの先8哩余で車道が越すローガン峠に至るの

で人気あり、と聞いたが、人影なし。人は蚊と共に、9月の山路から消えると見える。分水嶺をあとにすると、道は氷河の削った絶壁にさしかかった。のちに、モンタナ州へレナに住む友だちジャンから、当所で九死に一生を得た話を聞いた。彼女の一家が、グラニト・パークのシャレーで一泊し、この道を下山中、ふりむくとグリズリ熊が4、5頭後ろからやって来る。追ってくるわけではないが、ますます距離が狭まって来る。一步踏み誤れば、千尋の谷なので、道はずせせず、急ぎ脚すらできない。とうとう手の届きそうな所まで迫って来て、進退窮まり、一家全滅と思いきや、傾斜が僅か和らぎ、熊の方が、道はずして下りて行った。当時の戦慄が未だ忘れられず、それ以来、グリズリの徘徊する山は、御免という。

2000年に、DNAなどによる科学的調査により、公園内のグリズリ熊は、350〜400頭と推定された(Backpacker, Oct., 2000, p.30)。グリズリに比べて、黒熊は数倍の数だから、人口ならぬ熊口密度は高い。私は、熊は怖いのが、原始に惹かれる。特にグリズリ熊は、消え行く北米原始地帯の象徴的原住民。野生愛、山好きと恐怖の関連は複雑だ。私もジャンのような目に遭ったら、同じく御免というかもしれない。

胸突きを後にすると、何か雰囲気が変わった。思い出した。8年ほど前、みよとメニ・グレーシャから日帰りした時、昼飯に一息した折り返し地点だ(会報92号、p.12、挿し絵、p.18)。スイフトカレント谷の下流に、ブルヘッド湖を始めとして、いくつかの湖が連なっているのも、覚えのある眺めだ。

道が平坦になり、茂みから出ると、人声が聞こえ、目前にブルヘッド湖が日に輝いて広がっていた。その輝きの中を、仔連れのムースが渡ってくる。私は、「ムース！」と声を低めた警報を発した。大型の馬ほどの体躯のムースは、人に対する挙動が予測し難く、特に仔連れの牝は危険とされている。3頭の一隊は、母ムースが先立ち、このまま進むと、突撃されかねない。左岸に沿う、木間隠れの道に、遠足の長蛇の一隊が現れ、子供達を交

米国立公園番付け

	景 観	野生動物	閑 寂	山路、キャンプ場整備	総 評	得点
1	Glacier(モンタナ)	Denali	Denali	Glacier	Glacier	75
2	Rainier(ワシントン)	Yellowstone(ワイオミング)	Voyageurs	Isle Royale	Yellowstone	71
3	Rocky Mt(コロラド)	Glacier	Isle Royale	Rainier	Denali	70
4	Yosemite(加州)	Isle Royale(ミシガン)	Roosevelt	Rocky Mt	Rocky Mt	70
5	Denali(アラスカ)	Voyageurs(ミネソタ)	Big Bend(テキサス)	Sequoia-Kings(加州)	Olympic	70
6	Grand 峽(アリゾナ)	Rocky Mt	Olympic	Olympic	Isle Royale	68
7	Zion(ユタ)	T.Roosevelt(北ダコタ)	Badlands(南ダコタ)	Yosemite	Voyageurs	65
8	Olympic(ワシントン)	Olympic	Glacier	Zion	Rainier	65

える彼等の声で、ムースは退却。その退却路を私たちが、進めども、退けども遮っている形だ。私たちは怯えながらも、小走りに前進すると、ムース一家は右側に逸れて、茂みの中に姿を消した。遠足隊を先導するレンジャー・ガイドが、擦れ違いに、危険な一瞬



The bridge across  
Wilbur Creek near  
Swiftcurrent campground.  
Migo on the way back from a hike  
towards Swiftcurrent Pass,  
Mt. Grinnell and Garden Wall  
in the setting sun.

でしたねえ、といった。

メニ・グレーシャ幕営場沿いの駐車場に人だかりがして、向い側の山の中腹を指さし、注目していた。見ると、2頭のグリズリ熊が茂みに見え隠れしていた。氷河公園は、野生と人界の間の垣根が定かでない。季節中は人混みするこの大きなキャンプ場も、一区画毎、鉄函がコンクリート台に備えてある。耐熊食糧保存の仕掛けだ。

このキャンプ場の200程のテント区画に、例外が2つある。Through-hiker専用の2つで、駐車する場所が付いていない。その1つにテントを張った。テントは疎ら、車は10台位で大キャンプ場はガランとしていた。行程8・1哩、登り800尺弱、下り2300尺弱。

全行程、43・6哩。今から省みると、経験、訓練、自信の欠けた出で立ちだったが、無事、大陸分水嶺徒歩きの企画に緒をつけることができた。

#### あとがき

日本では七夕の昨日、近所の山へ一人歩き。昔ユタにお越しになった瀬田さんと登った、レイモンド山を巡るコースで、夏のウォサツチ山脈の醍醐味を味わった。キャニオンをへ

だてて南に眺める峻峰は、雪溪を抱き、レイモンド山の日影にも残雪が点在していた。花盛りで、野薔薇の薄紅と緑の対照が美しく、目に浸みた。スカレットトゲニアの鋭い真紅、可憐な勿忘草も目に留った。虻にさんざん刺された。トンボは虻を食うだろうか。食うとすれば、餌にこと欠かないであろう。塩湖城に下りたら、103度Fの焦熱地獄、換算してみると何と39度C。

登り1000米、6時間45分。今日になって脚の疲れがひどい。去年行った時は、これ程ではなかったはずだ。踵を痛め、今年の訓練計画が崩れていたせいだろう。来週も行ってみよう。疲労度が落ちれば、訓練の効果が分る。防虫液を忘れぬよう、自分にいいきかせている。

おとしの夏は山火事で、モンタナ州全州入山禁止になったし、去年は1988年の大火の焼跡を1日半歩いた。今年の夏も危険だ。多湿の日本でも、鳶口を振る烏勘三郎の歌がある位だから、乾燥地帯の米大陸内陸西部(注4)の火難は、想像に難くないであろう。特に最近2、3年早魘が続く、山火事の盛期の真夏を前にして、コロラドとアリゾナで記録上最大の山火事がある。3週間燃え続け、昨今漸く下火になり、避難疎開が、やっと解除された。大陸分水嶺の走るモンタナ西部は、

降雪量例年通り、晩春の雨は例年以上と聞いているから、やや楽観できそうだ。

## 注

1 米語。狭義には、食糧、野営具などを担ぐ山行の意。一面、日帰りと対照し、他面、自分で背負わぬ山行と対照する。例えば馬に荷担すると *horsepacking*。20世紀末までに辞書に載っていないので、近來の造語だが、今日では米語をはなす米国人で知らぬ人はなさそう。また *Backpacking* という、70年代に発刊した月刊誌があり、読む価値が高いとはいえぬが、発行部数29万5000部。いずれも *backpacking* が盛んな徴しだ。

2 カナダと米国の勤労感謝の日。9月の第1月曜。学校が多く直後に始まるので、旅客がいなくなり、氷河公園内のホテルやロッジは、晩秋を迎えて、一斉に閉館する。

3 人食い熊はあり得るが、例外中の例外。普通は人の気配を遠くから感知して避ける。危険なのは、途端に出くわした場合、仔連れの場合、餌を摂取中と、他に人間の食糧を求めて来る場合だ。一度味をしめると、味も場所も忘れないから、先ず熊に食糧やゴミを拒むことが必要だ。熊は臭覚が非常に鋭く、好奇心が強いことも留意すべきだ。

4 ユタ州塩湖城の年間降水量は40糎を

欠く。夏は15%程の低湿度が続く、砂漠の気候だ。

## 付録

注に言及した *Backpacking* 誌が、45程ある米国立公園中のどこが好ましいか、読者にアンケートを出した。その結果(2000年10月号)の横綱番付けを報告しよう。この番付けはあくまでも *backpackers* の立場より評価した結果で、一般大衆の評価ではない。例えば、氷河公園を訪れる人は、年間300万人といわれているが、その中、奥地に入って野営する人たちは、せいぜい1%位しかない。また閑寂の有無は勿論季節による。氷河公園の場合は、6月以前と9月以降は雪に閉ざされて、閑静な世界になるが、7月と8月は車で入れる所は、通外人ごみしている。因みに、カナダ以南の大陸分水嶺は、この番付けによる両横綱の氷河(グレイシャー)と黄石(イエローストーン)、大関のロッキーマウンテンを貫通している。

## 41年ぶりのヤロー共

山本 尚禎(昭36年)

中川滋夫65歳、永井新也66歳、有賀盈63歳、仲田修65歳、山本尚禎65歳。北沢峠長衛荘の玄関で書いた宿泊カードを管理人に渡して「仙丈へ行って、歌宿発13時15分の村営バスに間に合うには、明日朝何時に出発すればいい?」。

「年金貰っている人ばかりだからね…」の返事。

とにかく横浜の日の出4時25分をたよりに明朝4時出発と決め、今日はW杯ベルギー戦を応援することにした。

明くる6月5日。目覚めた午前3時の北沢峠の空は樹間が星で埋まっている。ハイシーズンには150名が泊る長衛荘も今日は6名。何処に寝ていたのか我々五人組は音もなく起きだしてきた。さすが昔は山男、年齢の助けもあり起床に問題無し。午前4時出発。ヘッドライト無しでも歩ける。ヘッドライトをつけても1ピッチ。朝陽が仙水峠から昇ってきて

た。谷間に残雪が残っている。樹間を1時間も歩いた頃、左に北岳のピラミッドが見えた。

「去年北岳から見た仙丈に登りたかったんだ」と感無量の永井。

1時間45分で大滝頭。更に30分で森林限界。小仙丈岳2855mに7時5分着。小仙丈から見る仙丈本峰、塩見から間の岳、北岳、鳳凰三山、富士山、甲斐駒、鋸が素晴らしい。西には木曾駒。宝剣が見えるが、八ヶ岳は影絵のように薄い。北アルプスは靄のなか。

小仙丈より360度の展望を堪能しつつプロムナードを各人それぞれの思いを噛みしめて仙丈本峰に8時25分に着いた。360度、首を動かしているだけで会話は要らない。

学生2年の時、頂上直下で見た「イワカガミ」を何故か思い出す。傍らで中川が「仙丈に来たのは大学以来だな」と感慨深そうに話している。同じような事を考えているものと感心していると、「4年前に来たよ」と有賀。五人組で一番の現役だ。

南の山並みを見ると、思い出すのは三伏峠から塩見く間の岳く北岳と縦走した2年生の冬合宿。皆が思い出しているようだ。この合宿最後のテント地は12月24日、池山御池小屋前の林の中だった。合宿の最後の食事の後、テントを出ると音もなく雪が降りだしてきた。まさにホワイトクリスマス。65歳の今でもこ

の感激に浸っている自分は、なんと幸せな男と皆さんに感謝。

あつ：早く下山しないとバスに間に合わない！夏のハイシーズンと違い、今は北沢峠の手前6・3Kmの歌宿迄しかバスは来ていない。

長衛荘の玄関を開けると、若いお嫁さんが「あつ五人組だ」、その声で内から管理人が「早

## ぐうたら登山紀行 続

大 建二郎 (昭37年)

昭和37年卒のメンバーを称してクロウ会という。一年前にヤロー会という強力な団体があるので、かなり影が薄い。総勢六人、有名な倉知と、あまり有名でない宮本、三井、朝木、遠藤と小生で成り立っておる。1997年9月6日に恵那山登山で、T中氏のいわゆるキセル登山の吸い口部分が数十年ぶりに復活し、以降単なる山登りではなく、温泉、

かったね」。たしかに11時15分には帰れた。

北沢峠のひなたで「男体山と3000mの山は違う。これで完全復帰だ」。ウイスキーを飲みながら気持ち良さそうな中川。頼もしい男が帰ってきた。

長谷村村営バスからJRバスへの乗り継ぎ。一番風呂の温泉の後は当然、酒。1時間半もあつと言う間に過ぎた。帰りの高速道路も順調、無事新宿に着いた。

カラオケ、ゴルフ付きの登山スタイルで、三井、遠藤、大の三人を中心にクロウ会ぐうたら登山分科会が活動をはじめたことは、針葉樹会報2001年2月号に報告をした。これはその続編である。

\*

2001年は早々に、夏は九州の山に行くことが決まったが、特筆すべきことは、夏だけではなく、5月の連休にもぐうたら登山を決行すべしという意見が出され、直ちに前橋に住む小林ギューさんと連絡をとって、赤城山へ行くこととなった。いつものごとく重箱の隅まで網羅する(遠藤にいわせると、かゆい所に手のとどくという表現が適切という)

三井スケジューラーから詳細な計画が届き、5月4日10時過ぎ前橋駅へ集合し、小林さんに車でピックアップしてもらったこととなった。参加者は、小林（進）、倉知、三森、三井、大の5人、本格派の倉知、三森は山だけ参加ということになった。

天候は晴、12時に黒檜山登山口に着く。この山は車道からの一歩目からぐいぐい登り始め、急登に次ぐ急登、おかげで1時間半で頂上に着く。遠くは雲がかかってあまり見晴しは良くなかった。下りは駒ヶ岳経由。夜は大沼湖畔の県営ロッジ緑風荘泊。時間は十分あると、がらがらのカラオケホールで歌っていたら、オバさんの一連隊が登場、これがうまいので早々に引き揚げようとしたら、私達の歌聞いてゆかないのとすごまれてしまった。翌日は浅草岳へ行く倉知、三森と別れて、残りは赤城GCで一戦交える。

\*

2001年8月15日から18日まで九州に出かける。15日朝7時37分羽田発、ザックを背に、山靴をはいて空港待合室に行くと、いつものメンバー、三井、遠藤が来ていた。小生にとっては一年に一度の大事事なので、羽田で皆の顔を見るとこれからの楽しみに心踊るものがある。熊本空港に着いて、この日は先ずゴルフ。猛暑の中で三人ともひどいスコ

アであった。レンタカーで杖立温泉に行きホテル大自然に泊る。それぞれシングルユースのいいホテルであった。

翌16日は快晴の中、牧の戸峠に駐車、久住山（1787m）に登る。急な登りは少なく気持ち良く11時10分、3時間で頂上へ、人が多勢いた。中岳にも足を延ばし、15時戻る。この日は竹田市まで車をとばし岩城屋に泊った。滝廉太郎で有名な岡城址を訪ね、夜はホテルロビーで花火見物。

17日は朝6時にホテル出発、祖母山の川北谷登山口へ向う。いつもコンビニで食糧、飲み物を調達して行くのだが、登山口近くの村にもあるだろうと思ったのが大間違い、まだ閉まっている店をたたき起して仕入れさせてもらった。祖母山（1756m）は大きな山で、約3時間尾根道を黙々と登る。11時50分、頂上はあまり展望が効かず、人もあまりいなかった。登山口の休憩所に九州では絶滅したといわれるクマが出没するという情報があり、見かけたら連絡してくれとの貼り紙があった。この日の夜は内牧温泉五岳ホテルに泊る。わざわざカラオケバーへ出張って歌いに行ったわりに、盛り上がらなかった。

18日、天気は下り坂、阿蘇の高岳（1592m）へ向う。ロープウェイの駅へ着いたらガスと風で運転中止とのこと。じゃあ歩いて

登ろうと誰もいわないのが、ぐうたらぐうたらたる所以。じゃあゴルフに切替えるかと、ロープウェイの支配人に紹介してもらい、高原道路を走っていたら、ここまで来てゴルフでもあるまいという良識がよみがえり、また方向を変え、草千里に向う。高岳より低いこれも阿蘇の一つとばかり、杵島岳（1270m）に登り、もう一つと、烏帽子岳（1337m）も登る。それぞれ頂上まで1時間ばかりであった。草千里の駐車場で遠藤が車のキーをトランクに入れたまま閉じてしまったというので大騒ぎ、街から修理屋を呼んで開けてもらおうといていた時、近くの売店のオバさんが、この落ちていたカギあなた達のもの？ということ一件落着。今回の山行の最大の事件であった。

\*

2002年も昨年と同様、5月と8月の2回山行を行った。五月連休はまた、小林（進）さんに車を出してもらい、男体山に行く。小林、遠藤、大の他、三井が風邪で計画作成後欠場が決まったので、中川さんが急遽参加。5月4日7時30分新幹線高崎駅へ集合。連休中ということ心配していた車の混雑もさほどではなく、志津峠に9時着、天候は曇で風がある。途中のスキー場ではまだ滑っているので雪が多いのではと心配したが、ザクザク

の状態でアイゼンは不用であった。頂上まで3時間、時々展望が開け、大真名子山、奥白根山、平ヶ岳までガスの切れ間に見ることができた。下って中禅寺湖畔の四季彩という豪華ホテルに泊る。翌日は名門日光CCでプレーしたが後半はバテて皆大たたきをしてしまった。東武日光駅前反省会をやり別れる。

\*

今年の夏は早くから北海道の羅臼岳と斜里岳へ行くことが決まり、6月には例年通り三井スケジュラーから詳細な日程が届いた。

8月15日、朝7時50分羽田発女満別空港行にいつものメンバー、クロー会の三井、遠藤、大にヤロー会の中川さんが加わり乗り込む。女満別でレンタカーを借り、オホーツク海を南下、原生花園に立寄った後、知床の宇登呂の街に到着、一人3500円の観光船で知床半島めぐりの後、明日の羅臼岳登山口のホテル地の涯と木下小屋を調べに行く。この岩尾別温泉の露天風呂は自然石の三段の浴槽が連なり、なかなかのもので、明日は是非入ろうという話になったが、当日はくたびれて、見向きもしないで帰ることになってしまった。

翌16日、ホテル知床を5時に出て、ウトロに一軒しかないコンビニで食料、飲料を仕入れて出発、木下小屋を6時10分発、天気は晴、羅臼岳は標高200mの木下小屋から166

0mの山頂まで標高差1460mもあり、これまでのぐうたら登山では断然一位、三井が既に登った蛭川君に、ぐうたらでは登れませんよといわれたとのこと。

なにくそと登り始めたものの、なにせだら長い。途中、弥三吉水と銀冷水という二つの水場で大休止し、10時20分やつと羅臼平着、ここからは岩峰登山という感じで大きな岩が積み上がった中をゆっくり登り、11時40分頂上。遠くに国後島がかい間見れた。下りはヒザに痛みがこないようにとゆっくりと下ったが、途中から痛みだしバンテリンは塗るは、バファリンは飲むはといういろいろ対策を講じつつ、16時30分やつと木下小屋へたどり着いた。往復10間を要するぐうたらメンバーとしては画期的な登山であった。

羅臼岳の10時間の疲労でヒザや腰に故障が出て、翌日の斜里岳は見送ろうという声も出ていたが、一晚寝たら皆元気になり、とにかく行けるところまで行こうと、朝6時ホテル知床出発、一路、清里町の清岳荘へ向う。天候は途中霧が出ていたが、登山口へ着いた頃から晴れてきた。清岳荘は標高600m、30台ぐらい止められる駐車場が、着いた頃はほぼ満杯であった。7時50分出発、沢に沿ってどんどん登って行く。途中大きな滝もいくつかあり高巻きしながら夏の沢は大変気持ち

が良い。3時間半で馬の背へ抜け頂上は11時45分、快晴とはいかないがまずまずの展望。頂上には20人くらいの人。下りは熊見峠を通る新道を例によつてのそのそと下り、清岳荘着は16時20分、8時間半もかかってしまったが、無事降りてこられて大満足の日であった。

この日は網走湖畔のホテルに泊り、翌日は女満別GCで夏の北海道のゴルフを満喫し、帰京した。

\*

来年の夏は白山に登り、片山津温泉でぐうたらすることに早々に決定した。



## 会務報告

### 平成14年度針葉樹総会

平成14年度針葉樹会総会は、6月26日、如水会館富士の間にて、33名の参加者を得て開催された。議事内容は下記の通りです。

1. 平成13年度活動報告及び平成14年度活動予定
2. 会長、副会長、評議員、幹事の人事
3. 平成13年度決算報告及び遭難対策基金収支報告
4. 平成14年度予算案及び遭難対策基金収支見込み
5. 平成13年度一橋山岳部活動報告及び平成14年度活動方針
6. 平成13年度一橋山岳部決算報告及び平成14年度予算案
7. 一橋山岳部80周年記念事業について
8. 堀岡清先輩（昭和10年卒）の講演

6までの議題は、評議員を中村正司氏から横山皖一氏（昭和27年卒）へ交替する変更があったのみで、そのほかは承認された。

また、7の議題については、石原会長から、一橋山岳部80周年記念事業の一環として、日本山岳会への特定寄付金100万円を遭難対策積立金から支出することが提案され、承認された。

なお、堀岡先輩の講演は、たいへん明晰な記憶にもとづく、ユーモアに溢れたお話で、参加された会員諸氏の感銘を誘っていた。堀岡先輩のますますのご健康を祈る次第です。

議題1、2の詳細。

#### ●平成13年度活動報告

▽懇親山行

①平成13年11月17日

蓼科「アダージオ」 15名参加

18日 蓼科山、八子峰、横岳に分かれて登山

②平成13年12月14日

丹沢 5名参加（高崎、佐藤、山本健、三井、高橋）

矢倉岳、不老山、中川温泉 「河鹿荘」泊

15日（土） 畦ヶ丸登山

③平成14年4月13日

丹沢、3名参加（山崎拓、山本健、高橋）  
ユースンロッジ泊

14日 熊木沢を遡行、蛭ヶ岳登頂

（一木会）

1月の新年会で、毎月第1木曜に如水会館一橋クラブ（14階）で6時から登山連絡会を開くことを決めた。2月7日、3月7日、4月4日、5月9日、6月6日に会合を開催した。毎回関係者にeメールで打合せ内容を連絡している。

▽会合

幹事会 平成13年6月15日

評議会 平成13年6月22日

総会 平成13年6月28日

新年会 平成14年1月23日

臨時評議会 平成14年4月18日

▽出版物

針葉樹会報第94号 平成13年7月発行

〃 第95号 平成13年12月発行

#### ●平成14年度活動予定案

▽懇親山行

①11月に蓼科「アダージオ」に宿泊して近傍の山に登る。

②丹沢1回、その他1回を計画する。

一木会は引き続き毎月開催する。

▽会合

幹事会 平成14年6月4日

評議会 平成14年6月12日

総会 平成14年6月26日

新年会 平成15年1月

▽出版物

会報 平成14年6月第96号発行

平成14年11月第97号

平成15年3月第98号

▽会員名簿(簡易版)

会報の発送時期に合わせて、年1回発行予定

●平成14年度人事案件

▽会長、副会長

会長 石原 脩(留任)

副会長 高崎 治郎(留任)

▽評議員

小林 茂雄 S 19 (留任)

石井左右平(議長) S 23 (留任)

中村 正司 S 28 ↓横山 皖一 (S 27)

山本健一郎 S 32 (留任)

中村 保 S 33 (留任)

市畑 進 S 33 (留任)

高橋 信成 S 38 (留任)

原 博貞 S 41 (留任)

中村 雅明 S 43 (留任)

西牟田伸一 S 47 (留任)

井草 長雄 S 48 (留任)

兵藤 元史 S 52 (新任)

近藤 泰 S 53 (留任)

白石 章治 S 61 (留任)

▽幹事

代表幹事 兵藤 元史 S 52 (留任)

総務幹事 松田 重明 S 53 (留任)

古田 茂 H 7 (留任)

会計幹事 西牟田伸一 S 47 (留任)

会報幹事 佐藤 恭 S 31 (留任)

井草 長雄 S 48 (留任)

川名 真理 S 62 (留任)

大谷 公重 H 10 (留任)

山行幹事 山本健一郎 S 32 (留任)

丸山 則二 S 33 退任

高橋 信成 S 38 (留任)

近藤 泰 S 53 (留任)

学生幹事 井上 裕之 H 1 (留任)

古瀬 泰介 H 8 (留任)

▽監事 保険幹事(平成13年度廃止)

渡辺 嘉佑 S 35 (留任)

中村 雅明 S 45 (留任)

▽新入会員 なし

●学生幹事の交代

学生幹事の井上君(NHK東京勤務)から沖繩に転勤になるので、学生幹事を退任したいとこの申し出がありましたので、後任に宗像充君(平成12年卒)が就きました。



総会にて 堀岡さんを囲んで記念撮影

### 針葉樹会平成13年度一般会計決算

(平成13年6月1日～平成14年5月31日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
会報発行費	258,574	450,000	前年度繰越	34,212	34,212
山岳部補助	90,000	90,000	納入会費	672,000	650,000
通信連絡費	49,687	50,000	会合余剰金	24,674	0
慶弔費	47,250	50,000	郵便貯金利子	30	300
学生保険補助	23,510	20,010	// (部室整備基金分)	43	300
会合費補助	8,231	0			
次年度へ繰り越し	253,707	24,802			
合計	730,959	684,812	合計	730,959	684,812

H13年度納入会費実績内訳

	千円	%
当年度分請求計	746	100
当年度分未徴収計	△ 169	△ 23
過年度分徴収計	89	12
次年度分徴収計	6	1
実入金額計	672	90

### 針葉樹会平成13年度部室整備基金決算

(平成13年6月1日～平成14年5月31日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
設備費	500,000	500,000	前年度繰越	500,000	500,000
		0			0
		0			
次年度へ繰り越し		0			
合計	500,000	500,000	合計	500,000	500,000

### 針葉樹会平成13年度遭難対策基金決算

(平成13年6月1日～平成14年5月31日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
学生保険補助	23,510	20,010	前年度繰越	5,138,600	5,138,600
ビーコン購入 (学生使用の雪崩搜索機器)	120,735	120,000	内遭難対策基金	4,238,600	4,238,600
			内遠征基金	900,000	900,000
			部室整備基金の戻り*	210,000	0
			松下順吉さんご遺族より	30,000	0
次年度へ繰り越し	5,262,905	5,145,900			0
内遭難対策基金	4,362,905	4,245,900	一般会計より(学生保険補助)	23,510	20,010
内遠征基金	900,000	900,000	利息等	5,040	7,300
合計	5,407,150	5,165,910		5,407,150	565,910

\* 小林博さん(S33)が一橋大学後援会に30万円寄付された。規約により寄付金の7割は、実際の出費を証明できれば、特定団体(この場合は山岳部)に直接支給される。部室整備基金を使ってクライミングウォールを作った50万円の出所は遭難対策基金であったのでこれの戻しとした。

### 針葉樹会平成14年度一般会計予算

(平成14年6月1日～平成15年5月31日)

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
会報発行費	450,000	258,574	前年度繰越	253,707	34,212
山岳部補助	100,000	90,000	納入会費	650,000	672,000
通信連絡費	50,000	49,687	会合余剰金	0	24,674
慶弔費	50,000	47,250	郵便貯金利子	30	30
学生保険補助	24,500	23,510	〃(部室整備基金分)	0	43
会合費補助	0	8,231			
次年度へ繰り越し	229,237	253,707			
合計	903,737	730,959	合計	903,737	730,959

### 針葉樹会平成14年度遭難対策基金予算

(平成14年6月1日～平成15年5月31日)

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
学生保険補助	24,500	23,510	前年度繰越	5,138,600	5,138,600
ビーコン購入	0	120,735	内遭難対策基金	4,238,600	4,238,600
80周年記念事業拠出	1,800,000	0	内遠征基金	900,000	900,000
			寄付金	0	240,000
			一般会計より(学生保険補助)	24,500	23,510
次年度へ繰り越し	3,343,600	5,138,600	利息等	5,000	5,040
内遭難対策基金	2,443,600	4,238,600			
内遠征基金	900,000	900,000			
合計	5,168,100	5,162,110	合計	5,168,100	5,407,150

## 報告

針葉樹会会長 石原 脩

### 一 山岳部創立八十周年記念事業 日本山岳会への寄付の件

平成14年6月の針葉樹総会決議を受けて、7月9日に、山本(健)、中村(保)、両君ともども、日本山岳会の常務理事会に出席して、山岳部OB会針葉樹会よりの百万円の寄付について申し出をいたしました。

趣旨は、すでにご高承の通りですが、八十年にわたり、特に日本山岳会学生部・青年部を通じてお世話になった御礼の気持ちを含めて、当会の中村保君が主宰する「海外への日本の登山活動情報発信事業」への協賛に、支出を特定した寄付である旨を話しましたところ、海外への情報発信事業が予想を上回る効果を上げ、日本の評価を高めている旨の談話があり、快く了承されました。

この決定後、西牟田会計幹事より寄付金の送金が行われたことをご報告します。

## 二 望月達夫先輩のご遺族より 針葉樹会に寄付を頂戴した件

昭和13年卒業の望月達夫先輩が病床に伏しておられたことはご存知の方もおられたと思いますが、この8月21日に急性肺炎のためにご逝去されました。

その後、ご次男の恒夫様から山本（健）〇



日本山岳会図書室 望月文庫の前で

Bを通じて、御香典返しの際は、故人の意向を含めて、日本山岳会及び針葉樹会への寄付としたい旨のご相談がありました。

日本山岳会が了承したこと、また日時も限られておりましたので、一存でお受けすることといたしました。9月に発送された葬儀会葬者への礼状では、ご遺族よりその趣旨を伝えるとともに、同封別紙にて日本山岳会及び針葉樹会より御礼を申し上げます。

その後10月9日、ご長男儀男様・ご次男恒夫様が日本山岳会を訪問され、大塚会長と同席した石原（山本、中村）にそれぞれ金一封（50万円）をお手渡しいただきました。

儀男様より、故人の意思を体した使途があれば幸甚とのご挨拶がありましたので、当方よりは、目下の急務である学生対策などに使わせて頂きたいとご返辞しました。

添付の写真の背景にある大きな書棚は、日本山岳会図書室にある「望月達夫文庫」です。

また、大塚会長と私の間に立つご兄弟のうち、向かって左の儀男様は、故達夫先輩と瓜二つで、ご本人から直接お話いただいたように、同席の全員が感じたことをご報告いたします。

## ●上原さん博士号取得祝賀会の報告

日時 8月1日、17時30分

場所 如水会館記念室西

出席者 上原利夫、山崎擴、石原脩、高崎治郎、松尾寛二、石和田四郎、佐藤恭、山本健一郎、中村保、市畑進、宮川守久、有賀盈、三井博、高橋信成、西牟田伸一

経緯 1997年4月、住友商事の関連会社の監査役を定年退職した上原さんは一橋大学法学研究科修士課程に入学、引き続き博士課程へ進学し、今年7月博士号を取得、学生生活にピリオド。67歳での博士号取得は日本最高齢、修士入学以来5年4カ月は日本最短の部類ではないかとの話も。

## 一木会報告

### ●平成14年7月4日

出席者 山崎拓、佐藤恭、市畑進、三井博、高橋信成、山本健一郎

太田先生の命日に当たる7月4日でしたが、針葉樹会総会の翌週とあつて参加者は6名でした。

#### ▽山行報告

佐藤 6月、3年連続して北米の極北の地を訪問。一作年のアラスカ、昨年のバフィン島に続いて今年はユーコンに行った。

山本 6月はスイス、山を見ただけで、ハイキングは天気が悪く、雪も多く出来ず。

### ●平成14年9月5日

出席者 石井右左平、山崎拓、佐藤恭、三井博、高橋信成、蛭川隆夫、竹中彰、山本健一郎

夏休みを挟んで日焼けした皆さんが集まりました。望月達夫さんが亡くなられ、ひとしきり思い出話しが交わされました。

#### ▽山行報告

石井 シアトルに5日ばかり行き、オリンピック・マウンテンに登った。後は山崎さんと二人で白山。

山崎 7月、佐藤、山本と大山北尾根を登つ

た。8/26～28 白山、金沢で車を降り、別当谷まで行き室堂に泊まった。

佐藤 9/10 氷河公園から南岳に登りキレットから北穂へ、山本。

山本 8/19～22 種池から針の木を越え舟窪から七倉へ下山。舟窪は48年ぶり。

三井 7/20 十勝岳、上り3時間、下り2時間、雨で美瑛は割愛。8/16は羅臼 大、遠藤に中川も参加。ウトロに泊まり木下小屋から往復、8/17は斜里岳、往路沢沿い、復路尾根筋。

高橋 7月蓮華温泉から白馬岳。8/23 八方の黒菱平に車で上り、唐松登頂後、五竜山荘泊。24日、五竜登頂後遠見を下山。12月エヴェレスト・ビューホテルへ行くので10月は丹沢で体調を整える。

蛭川 7月、10日ばかり九州の山、九重(中岳)、阿蘇、祖母に登り、祖母でウエストンの碑を見て感激した。8月は本間君に他の仲間を加え飯豊に登った。

### ●平成14年10月3日

出席者 三井博、高橋信成、蛭川隆夫、竹中彰、西牟田伸一、山田英明、山本健一郎

今日は、オーション会の懇親山行がアダージオで開かれており、石井、山崎、佐藤の常連が欠席でしたが、西牟田君と学生の山田君

が参加。

#### ▽山行

宮之浦岳と種子島

三井君が立案、佐藤、高崎、春日井、中川、山本、三井、竹中、蛭川、川名の9名がいまのところ参加予定。時期 11月28日(木)～

12月1日(日) 解散。  
懇親山行(11月16～17日)  
昨年同様蓼科の「アダージオ」で開催。  
月見の宴 11月2日(土)。

山本 佐藤さんと氷河公園經由南岳に登り、キレットを越えて穂高小屋から涸沢に下りた。

三井 中の湯から焼岳、常念日帰り等。

蛭川 鏡平から笠が岳に登り、くりや谷を下りた。

#### ▽学生の山田君から

現在学生は、山田君一人。9月7日兵藤、古瀬、宗像、山田が部再建に向け協議した。

その協議に基づき

1 10月募集説明会を2～3回行い、獲得した部員の歓迎コンパと歓迎登山を実施するので、OBの参加をお願いしたい。

2 育成プログラムを作り、04年3月までの山行計画を立てたので、OBの参加をお願いしたい。

皆さん是非ご協力お願いします。

### ●中村保君講演会

国際山岳年の今年、日本山岳会主催で、中村君による「チベットのアルプスへ」と題する特別記念講演会が9月18日(水)千駄ヶ谷の東京体育館で開催された。

### メール通信

## 月見の宴にて

### ——山岳部をどうするか

11月7日

西牟田伸一 発信

11月2日、月見の宴がありました。

参加者は、石井、中村正司、横山、山本(健)、高崎、竹中、名和、上原、三井、井草、兵藤、稲毛、古田、宗像、学生山田、日大、青学の学生各1名でした。

山岳部をどうするかについていろんな議論がありました。当日、体調不良で欠席された石原会長が昨日手紙をくれた意見を含め、その要点をご紹介します。

1) 発想の転換が必要

これまでの80年続いた山岳部の概念は忘れるべきである。山岳部員は卒業するまで組織に拘束され、上級生になれば下級生の指導に一定の責任を持たされ、OBの意見に従われる。山岳部という名前は実体がどうであれ、まず、このような先入観を持たれてしまふ。思い切って伝統ある名前にサヨナラするしかない。

### 2) 募集方法の見直し

部員募集も一つのマーケティングである。長くて1年間位の短期目標で登る目標の山を定め、そのツアーに参加する学生を学内から募集する。参加者は目標に向け、必要な技術、体力、装備、情報を準備する。ツアーの数は同時に複数あってもかまわないし、一人で複数のツアーに所属してもよい。

### 3) 石原さんの意見(後出)

翌3日は、横山、高橋、西牟田、兵藤、稲毛、山田で扇山に登りました。鳥沢の駅から歩いて2時間半で頂上着。秋晴れの中大勢の老若男女がいました。頂上で鍋をつつき、下山途中の君恋温泉で一風呂あびて楽しい山行となりました。

### ●石原会長の提案

西牟田様 「今後、3月になって誰も部室にいななくなったりした折りでも、やり様があるのではないか? 今からその辺も含んで、若手の人たちにアイデアを提供するのが趣旨」として、小生の手紙の全文をeメール配信していただければ幸甚です。

前略 11月1日まで八ヶ岳の山荘に滞在し、雪に降られて体調を崩し、月見の宴には出席予定だったのに出られませんでした。

なにか学生の事で進展があったら教えてください。月見の宴に出て、話したかった事は、例えば学生が居なくなっても部室が残るので、そこで背水の陣が敷けないかということです。

沈滞する日本山岳会の10月号会報でも、ルームを中心においた「クラブライフ」を推進する事をトップ記事にしています。即ち、ヒマラヤの大規模隊から少人数へ、山岳会や学校の組織から公募登山等々への質的变化に対応したいとしています。

そこで、山岳部室をBaseに自然を好む学生の集いで再構成が出来ないかと考えた訳です。あくまでも「例えば」ですが、次に日本山岳会あのアイデアを借りて、一人でブレインストーミングをしてみました。参考に

なれば幸甚です。

- 1) 部室の看板を↓「山岳クラブ」
  - 2) 図書室(自然)——勿論山の案内書中心  
——に親しむ本の系統的充実)
  - 3) 人集め行事
    - ・映画会(日本山岳会所蔵フィルム)
    - ・山の自然学講座(講師:日本山岳会の山の自然学研究会員)
    - ・山行打合せ 等々
  - 4) リーダー兼クラブルーム管理人募集  
今時は巷のボランティアグループでも女性の方が優秀……管理費を出す。
  - 5) 室内設備の充実  
冷暖房、電話、パソコン
  - 6) 自然と遊ぶルーム(室外)  
畑・野草と花・植樹。鳥の巣箱、薫製機  
セット(ヒーターとも最大1万5千円)、  
春夏秋冬の頭上の星座図
- そして自然と親しむための安全な登山技術を!

以上  
石原 脩

## 編集後記

\*今号は日江井さん(昭16)、檜渕さん(昭17)、望月敏治(昭25)さんの追悼文をお載せすることになりました。心からお三方のご冥福をお祈り申し上げます。

\*昭和32年卒の清水啓さんが去る7月4日、3年間の闘病の末、悪性リンパ腫により70歳でお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。

\*既に皆様ご承知と思えますし、今号の会長による「ご報告」二項でも述べられている通り、8月には望月達夫(昭13)さんが亡くなりました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。次号には先輩を偲んでの追悼文を、幅広い会員層の皆様からお寄せいただきたく、ご協力をよろしくお願い申し上げます。(佐薙)

\*現役の山田君が来春卒業してしまうと、活動する部員がいなくなってしまうということで、月見の宴でもひとしきり山岳部論議が盛り上がりました。山というフィールドに何を求めるかは、時代や思潮、年齢などによって変わるものですから、山岳部も今の若者のニーズに応えられれば、まだ人が入って来ると思うのです。フリークライミングが人気だというなら、費用をかけても、そういう人材を集めて活性化する方策を考えてもいいのではないかと思います。(井草)